2018 年度

アンコール遺跡整備公団

インターンシップ報告書

公立小松大学/金沢大学

アンコール遺跡整備公団インターンシップ実施委員会

2019 年 1 月

写真１．ルンタエク エコビレッジでの記念写真（左から：酒井朋花，村井七海，横井菜美，土橋香乃，大御悠瑠花，田中日菜向，埴崎未緒，小泉奈央，肥田望来，2018 年 8 月 29 日）.

写真２. 業務初日の始業式とハン･プゥ副総裁の挨拶，担当職員との初顔合わせ.

写真３. その日の業務内容についての担当職員とのディスカッション.

写真４. 最終日の面談試問にむけての担当職員との業務内容の復習.

写真１．西バライの現場で担当職員の説明をうける.

写真２．バンテアイ・クディ寺院での植林事業に参加.

写真３．アンコール・ワット寺院での担当職員の説明. カンボジアの神話などを学ぶ.

写真４．アンコール・トムのバイヨン寺院の見学.

写真５．公団職員が運転するバイクで現場を移動.

写真６. ルンタエク･エコビレッジ開発総責任者の May Marady 氏による村づくりプロジェクトの説明.

写真７．ルンタエク・エコビレッジの寺院に参拝.

写真１．シェムリアプ領事事務所の實取所長を訪問.

写真２．トンレサップ湖畔のハス畑にて日本国大使館の別所公使ご夫妻と.

写真３．トンレサップ湖をゆったりと遊覧.

写真４．ゾウにゆられての遺跡めぐり.

写真５．プノム・クーレンの滝で水遊び.

写真６．パブストリートのカフェでの休日のランチ.

写真７．クメール舞踊の踊り子さんたちと記念写真.

写真１．修了証書の授与式．受入責任者のプゥ副総裁から証書を受け取る．

写真２：お世話になった職員たちとの夕食会．

写真３．授与式後の関係者全員との記念写真．

写真４．埼玉大学グループの野外調査実習．トンレサップ湖での植生調査．

写真５．埼玉大学グループの野外調査実習．タ・プローム寺院の巨樹の下で．

写真６．埼玉大学グループの野外調査実習．アンコール・ワット寺院の境内にてオジギソウチャレンジ．

2018年度アンコール遺跡整備公団インターンシップ報告書

目　　次

１．ごあいさつ	山本　博	・・・	1
２．2018年度インターンシップの概要と成果，今後の課題	塚脇真二，ハン・プゥ	・・・	3
３．公立小松大学からのインターンシップ学生の派遣	木村　誠	・・・	7
４．インターンシップ参加学生の報告			
１）アンコールインターンシップで学んだこと	横井菜美	・・・	11
２）アンコールインターンシップを終えて	村井七海	・・・	15
３）カンボジアでの学び	大御悠瑠花	・・・	19
４）カンボジアでのインターンシップを終えて	田中日菜向	・・・	23
５）インターンシップに参加して	肥田望来	・・・	27
６）初めての発展途上国でのインターンシップを終えて	小泉奈央	・・・	31
７）初めての地，カンボジアでの経験	土橋香乃	・・・	35
８）アンコールインターンシップに参加して	酒井朋花	・・・	39
５．チューターの報告			
１）チューターのお仕事	埴崎未緒	・・・	43
６．埼玉大学の海外フィールド実習報告			
１）埼玉大学の海外フィールド実習	荒木祐二	・・・	47
２）カンボジアで学んだこと	直井美海	・・・	50
３）カンボジアフィールド実習をふり返って	野手伊吹	・・・	53
４）Youは何しにカンボジアへ？	藤井　航	・・・	56
５）カンボジアフィールド実習に参加して	矢島英勝	・・・	58
７．資　料：2018年度アンコール遺跡整備公団インターンシップの概要		・・・	61

図版１：インターンシップの参加学生たち（始業式，ディスカッション，最終面談試験）
図版２：インターンシップでのさまざまな現場業務
図版３：インターンシップの休日（アンコール世界遺産公園とトンレサップ湖）
図版４：インターンシップ最終日・埼玉大学の海外フィールド実習

１．ごあいさつ

公立小松大学・学長　山本　博

「2018 年度アンコール遺跡整備公団インターンシップ報告書」に本稿を寄せることができますこと，うれしく幸いに存じます。真に充実した報告書と感じ入りました。編纂，発行にあたられたインターンシップ実施委員会の皆さま，寄稿された皆さまを含め，関係各位に敬意と謝意を表します。

本インターンシップは，金沢大学によって，2010 年度に開始され，以来，順調に継続されて現在に至ります。私は 1990 年度から 2016 年度まで金沢大学に勤務し，2014 年度からの 3 年間は，理事・副学長として国際・附属病院・同窓会を担当しました。本インターンシップ事業が 2015 年度，金沢大学の教育 GP に選ばれたことはまだ記憶に新しいところです。2015 年度から 2017 年度にかけては，公立小松大学の前身校，小松短期大学の学生が，そして，本年度には，公立小松大学の学生がインターンシップに参加する運びとなりました。公立小松大学にとって，特記すべきことは，このインターンシップが，開学後初の学生海外派遣事業となったことです。加えて，塚脇真二金沢大学教授・公立小松大学特任教授と在カンボジア日本国大使館およびカンボジア政府の特段のご配慮により，本インターンシップ事業が，日カンボジア友好 65 周年事業として認定されましたことは，真に栄えある，うれしいニュースでした。

改めて，以下の方々に，心より御礼申し上げます。まず，塚脇真二先生に；長年にわたって築かれた信頼に基づく，関係諸方面との真摯なご交渉ご調整なしには，本事業の開始も，また継続も，ありえなかったと思います。つぎに，Dr. Hang Peou アンコール遺跡整備公団副総裁，別所健一在カンボジア日本国大使館公使，實取直樹在シェムリアプ日本国領事館所長に；各位のご高配なしには，本事業の実現は叶いませんでした。長野勇小松短期大学前学長と木村誠小松短期大学准教授に；先生方の先駆的なご努力と，木村先生のご引率のお蔭で，公立小松大学 1 年生を安心してアンコールに送り出すことができました。金沢大学と公立小松大学および小松短期大学の関係者の皆さま，公立小松大学基金にご篤志をお寄せいただきました方々に；皆さまのご理解とご支援なしには，本事業の達成はありえませんでした。

ユネスコ世界遺産アンコール遺跡は，クメール王朝時代の貴重な文化遺産であるとともに，エリア内に 100 を超す村落が存在し，そこに 10 万人を超す住民が居住している点でユニークです。アンコール遺跡整備公団を中心に，文化資源と人々の生活の両者を持続可能な形で未来につなげるための活動が活発に展開されているゆえんです。そのような活動を，現地で目のあたりに体験できる本インターンシップは，真に優れた類稀な教育プログラムであると思います。

公立小松大学からは，大御悠瑠花，肥田望来，土橋香乃（以上，国際文化交流学部），横井菜美（保健医療学部看護学科）の 4 名が参加しました。肥田さんはルンタエク・エコビレ

ッジ，土橋さんはクメール住居センターで，文化遺産のエリア内における産業のあり方や地域住民支援に関する活動を，大御さんは北バライ貯水池，横井さんは西バライ貯水池で，水質・水量の調査分析・管理に関する活動を，有意義に成功裡に行いました。4 人ともたいへん成長して帰ったと思います。

最後に，本インターンシップが，金沢大学，公立小松大学の学生たちの貴重な学びの機会として，末永く継続されますよう念願しますとともに，関係各位には，ひきつづき温かなご理解ご支援を賜りますようお願い申し上げ，あいさつとさせていただきます。

２．2018 年度インターンシップの概要と成果，今後の課題

金沢大学・教授／公立小松大学・特任教授　塚脇真二
アンコール遺跡整備公団・副総裁　ハン・プゥ

2010 年度に金沢大学ではじまったカンボジアのアンコール遺跡整備公団（略称：アプサラ公団）での海外学生インターンシップも今年度で 9 回目となった。今年度は新設されたばかりの公立小松大学の 4 名と金沢大学の 4 名の計 8 名の学生が同公団でインターンシップの業務に 2 週間従事した。また，例年どおり，埼玉大学の海外フィールド実習がこのインターンシップ期間に合わせて実施された。アプサラ公団の担当職員たちの手厚い指導と保護のもと，学生たちの積極的ながらも節度ある行動もあって，すべての予定を無事に終えることができた。同公団の Sum Map 総裁，ならびに同公団関係諸氏に心からの謝意を表したい。また，公立小松大学・金沢大学の教職員からなるインターンシップ実施委員会の関係諸氏，公立小松大学の山本博学長，同横川善正副学長，金沢大学環日本海域環境研究センター長尾誠也センター長ほか両大学の関係のみなさまにはさまざまな支援をいただいた。さらに，在カンボジア日本国大使館にはこのプログラムを平成 30 年度日本カンボジア友好 65 周年事業に認定いただくとともに，別所健一公使にはインターンシップの現場をご訪問いただいた。在シェムリアプ日本国領事事務所の實取直樹所長には，カンボジアについてのさまざまな情報を滞在初日にご提供いただくとともに滞在最終日には学生たちを朝食にご招待もいただいた。これらの関係諸氏に深い感謝の意を表したい。

公立小松大学からの参加学生は国際文化交流学部の 1 年生 3 名と保健医療学部看護学科の 1 年生 1 名の計 4 名であり，一方の金沢大学からの参加学生は，人間社会学域国際学類 2 年生 1 名，同 3 年生 1 名，同学域人文学類 2 年生 1 名，同学域学校教育学類 2 年生 1 名の計 4 名で全員が女子である（写真 1）。このプログラムへの応募者数は，公立小松大学が 11 名，金沢大学が 9 名であり，競争率はいずれも 2 倍を超えている。これに加えて金沢大学では参加者数 4 名ではあるが参加学生たちの所属は 3 学類にわたっており，学類構成の多様化という当初の目的は今年度も達成できた。

写真 1．アンコール・ワット寺院にて

今年度の参加学生たちは，協調性や積極性，社交性などのすべてにわたって例年以上にきわだった学生たちだった。なお，公立小松大学の参加学生たちは同大学の海外インターンシップ助成金 7 万 5 千円を，金沢大学の参加学生たちは日本学生支援機構の平成 30 年度海外

留学支援制度の助成金 7 万円をそれぞれ全員が受け取っている。これによって学生たちの経済的負担を約半分に減らすことができた。このインターンシッププログラムの企画・調整から参加学生の募集や選別，実施，そして実施後にいたるまでの日程などは巻末の資料を参考されたい。

公立小松大学からは引率教員として木村誠准教授が全行程にわたって学生たちに同行している。また，昨年度のこのプログラムに参加した金沢大学人間社会学域国際学類 4 年の埴崎未緒が全行程にわたってチューターとして活躍してくれた。現地での生活や公団での業務にかかる参加学生たちの相談相手，学生たちと公団職員との間に入っての連絡や時間調整，学生たちの安全管理の補助と多岐にわたる業務であったが彼女はすべてを的確にこなしてくれた。海外フィールド実習を行った埼玉大学では，教育学部の荒木祐二准教授が大学院生 2 名と学部学生 2 名の計 4 名を引率して現地を訪れている。

参加学生たちは 2 名ずつの 4 グループに分かれ 2 週間をとおして公団の通常業務に従事した。4 つのグループに分かれながらも，グループごとにそれぞれの担当業務に従事する日があったり，あるいは 4 つのグループが合同で同じ業務に従事する日があったりと業務への従事形態はここ数年と同じく臨機応変のものであった。しかしながら，この業務形態によって，全学生がすべての業務をひととおり経験することができたし，また，それぞれの担当業務を深く理解することができたのはむしろ効果的であったと考える（写真 2）。

写真 2. クメール住居センターでの合同業務

今年度のインターンシップで注目されることは，昨年度に引き続き，インターンシップとしての 2 大学の学生 8 名とチューター1 名に加え，海外フィールド実習としての埼玉の学生･院生計 4 名という，総勢 13 名の学生たちがアンコール世界遺産で活動したことである。これらの学生たちが所属する学類や学部はさまざまであり，学年も 1 年生から大学院生までと多岐にわたっていた。そのため，大学間の交流はもちろんのこと，専門分野や学年の垣根を超えての学生たちの交流にはよい相乗効果や波及効果をみることができた。学生たち個々の専門分野を背景とする多様な興味が他の学生の関心を呼び，それが連鎖的に広がっていくという傾向を例年以上に随所でみることができた。とくに，大学生になってまだ半年たらずにもかかわらずの公立小松大学の 1 年生たちの活発さには目をみはるものがあった。

さらに，海外インターンシップと海外フィールド実習とでは活動内容が異なるとはいえ，3 つの大学での合同企画としてのこのプログラムの実施は，それぞれの活動の一部を重複させることで学生たちの安全管理体制をより堅固なものにすることになった。植物生態学を専門とする埼玉大学の荒木准教授はカンボジア情勢に習熟した若手研究者であり，心理学

を専攻する公立小松大学の木村准教授はこれまでのこのプログラムへの参加で十分な経験を積んでいる。専門分野が異なる若手研究者の参加によって，参加学生たちは専門的な解説を現場で受けることができた。

インターンシップ業務中，バンテアイ・クディ寺院で実施された植樹祭に学生たちは参加した。業務を離れて担当職員らとアンコール・ワット寺院などの世界遺産の見学にも行った（写真 3)。最終日にはアプサラ公団関係者や担当職員らとシェムリアプ市内のレストランでお別れ夕食会を開催した。いずれも参加学生たちにとっては忘れえない思い出になったことと思う。

写真 3. アンコール・トムの見学

このインターンシップの成果は例年と同様，以下の 3 点に集約される。学生たちへの「教育効果」，成果の「現地への還元」，そして関係大学の国際貢献にかかる「周知（宣伝)」である。これまでの報告書とほぼ同じ内容になるが以下に記述する。

（1）学生たちが大きな満足と大きな経験とを確実に持ち帰ることができた。はなやかに喧伝されるばかりの世界遺産であるが，その維持管理や観光客の便宜のためにどれほどの労力がその裏側で費やされているかを公団での業務をとおして参加学生たちは実体験することができた。また，昨今のはやりの言葉である「持続可能」のために，さまざまな苦労がその背後あることを経験した。「最初のイメージとはおおきく違っていた」とは今年も学生の口からもれていた感想である。これとともに「貧しい発展途上国」というイメージが先行するカンボジアのくったくのない人々や豊かな自然に学生たちは日々触れることができたし，国際協力の舞台であるとともに地域住民が暮らす世界遺産公園の特異性を目の当たりにもした。「国際貢献」と「地域社会」というふたつのキーワードを学生たちは実体験したことになる。学生たちの報告にはこの 2 週間の体験が生き生きとつづられている。したがって，このインターンシップでの 2 週間は学生たちにとってきわめて充実したものだったと客観的に評価される。これはこのインターンシップの実施が学生たちへもたらした大きな教育効果といえる。

（2）学生たちを指導することによって公団職員に大きな教育効果をもたらした。参加学生たちはそれぞれの担当職員たちとともに公団の通常業務に従事した。学生たちの同行が彼らの業務の支障になった点は否定できないが，インターンシップ終了後に公団上層部から，学生たちの存在が職員たちに大きな教育効果をもたらしたことを例年と同様に感謝の意とともに指摘された。具体的には，1）学生たちを案内することで職員たちの「説明」の技術が向上したこと，2）職員たちが説明する「楽しみ」や「喜び」を味わったこと，3）業務についての全般的なことを学生たちに説明することで，職員たち自身が業務内容を総括する

ことができたこと，である。これらの指摘はこのプログラムによる現地への成果の還元効果があったことをまさに示すものといえる（写真 4)。

写真 4. 担当職員による現場指導

（3）学生たちの活動がアンコール世界遺産公園で大きな話題となった。安全管理の観点から，学生たちはアプサラ公団の制服を着用して日常の業務に従事したが，カンボジアではエリート集団として知られる同公団の制服を日本人の学生たちが着用するのはきわめて目立つものであり，現地の人々や日本語観光ガイドたち，彼らが案内する日本人観光客におおいに注目された。参加学生たちが制服にアプサラ公団のロゴとともに大学のロゴをつけて業務にのぞんだことも効果的だった。さらに，アンコール世界遺産を国際的な枠組みで維持管理するアンコール世界遺産国際管理運営委員会やUNESCO プノンペン事務所でもこのプログラムでの学生たちの活動が話題となった。したがって，このインターンシップは世界遺産における両大学ならびにわが国の国際的な貢献活動として一定の宣伝効果をあげたといえよう。

このプログラムは 10 回目となる 2019 年度まで金沢大学を責任大学として実施し，その後は創立 3 年目となる公立小松大学に実施母体を移す予定であった。しかしながら，金沢大学から経済的な支援として受けていた教育 GP 経費が予告なく打ち切られたことや，このプログラムの実施責任部局のひとつであった人間社会学域国際学類が共催からおりてしまったことから，今年度は公立小松大学と金沢大学環日本海域環境研究センターによる合同実施とせざるを得なかった。そのため，とくに開設まもない公立小松大学にはさまざまなご負担をおかけすることとなったが，山本学長をはじめとする関係のみなさまのご尽力のおかげあって今年度のプログラムも例年以上の成功のうちに終了させることができた。

アプサラ公団での海外インターンシップを将来にわたって継続するための基礎と実績はこれまでの実施によって十分に確立できている。想定外の事態に対処するためだったとはいえ，今年度の両大学での合同実施の成功によって実施母体を来年度から公立小松大学に移す準備はととのった。例年どおりの埼玉大学の海外フィールド実習としての参加で複数の大学による実施ネットワークも安定して継続できるみとおしが得られた。アンコール世界遺産が位置するカンボジアのシェムリアプ州と公立小松大学がある小松市との姉妹都市計画も進行中である。このように，来年度以降への継続的な実施へ向けての明るいみとおしが得られた今年度のプログラムであったが，昨年度の報告書にもしたためたとおり，昨今の学生たちに海外への関心がうすれていることや，海外体験プログラムが学内外で多数企画され実施されている現状を考えると，このプログラムについても内容のさらなる充実へ向けての検討と努力を怠りなく継続すべきといえよう。

３．公立小松大学からのインターンシップ学生の派遣

公立小松大学国際交流センター・准教授　木村　誠

金沢大学において 2010 年度に始まったアプサラ公団での学生インターンシップに，今年度は本学から 4 名の学生が参加した。まずは金沢大学教授，そして公立小松大学の特任教授として，平素より本学の国際交流事業に対してお力添えを頂き，本事業においては関係各所との調整にご尽力を頂いた塚脇真二氏，本事業へのご理解と，学生派遣のための体制整備に貴重なご助言を頂いた山本博学長，横川善正副学長，今年度もインターンシップの受け入れをご快諾頂いたアプサラ公団副総裁 Hang Peou 氏，アンコール遺跡整備公団インターンシップ実施委員会の皆様，ほか関係の皆様に心からの謝意を申し上げたい。

公立小松大学は，地域と世界で活躍する人間性豊かな人材を育成することを基本理念の一つとして掲げ，平成 30 年 4 月に開学した新しい大学である。本インターンシップは，公立小松大学開学後，初めて実施される海外インターンシップであった。この記念すべき事業が，大きな成果とともに成功裏に完了できたことは大変に喜ばしいことである。本事業は平成 28 年 9 月 2 日 に小松短期大学がアプサラ公団との間で締結した「アンコール世界遺産での能力開発プログラム」に関する覚書を継承する形で実施された。ご在職中，本事業への参加の決定を含め，大学の国際化を力強く推進された長野勇小松短期大学前学長に対しても改めて深謝する次第である。

本学からは，国際文化交流学部から 3 名，保健医療学部看護学科から 1 名の学生が参加した（写真 1）。本インターンシップの業務は，観光開発から地域住民の生活支援まで多岐に渡るものであり，各学部での教育内容とも大きく関連するものであったと考えられる。参加学生が何を学び，どのように成長したのかは，それぞれの報告の中に活き活きと書かれている通りである。

写真 1．出発日に小松空港にて

私は 2008 年度から大学の国際交流事業を担当しており，本事業については 4 回目の引率業務であった。これまでの経験から，担当教職員の最も重要な業務は危機管理体制の構築に尽きると実感している。公立小松大学として初めての学生派遣プログラムとなることからも，危機管理体制の構築は遺漏の無いよう慎重に検討を進める必要があった。この点についても，関係教職員の献身的な協力を得て，学生および保護者が安心して渡航できる体制を整えることができたと考えている。カンボジア王国という国に対して抱くイメージは世代によっても異なると考えられるが，メディアが切り取る情報の影響からか，ネガティブな印象

を持つ日本人も珍しくないだろう。その点，本プログラムが在カンボジア日本国大使館，在シェムリアプ日本国領事事務所の支援を受けて実施されているということは，危機管理の観点からも特筆すべきことである。インターンシップ期間中に参加学生が別所公使，實取領事館所長と直接お会いする機会に恵まれた。お忙しい中，学生を激励してくださったお二人には心から感謝申し上げたい。

本学からの参加学生は1年次生であることからも，学生本人および関係者が，2週間の海外インターンシップに対して様々な不安を抱くことは自然なことである。そのため，学生が不安なく出発できるよう，また，保護者や学内教職員には安心して送り出していただけるよう，今年度も事前研修に力を入れた。アンコール世界遺産地域の特色，アンコール遺跡整備公団の役割と業務，カンボジアの歴史と文化などの基礎知識の説明に加え，本学保健管理センター中西美智子様による感染症に関する講座，旅レジ登録などの渡航準備に関する研修も実施した。より効果的で効率的な事前研修の構築のため，今年度の学生からのフィードバックを受けて次年度の事前研修に向けた改善を検討したい。次年度は今年度の参加学生から，後輩に様々な助言をしてもらう場を十分に設けたいと考えている。

今年度の参加学生がインターンシップに取り組む姿勢は模範的といえるものであった。集団行動の中で，仲間を気づかいながらもそれぞれが積極的にコミュニケーションを取り，疑問点を解消しようと努めていたことが十分に伺えた。また，誰に促されるまでもなく，熱心にメモを取りながら話を聞く姿勢は頼もしいものであった。学生間の人間関係も非常に良好で，移動中の車内では所属大学に関係なく，楽しげな会話が絶えなかった。静かになったときは大体全員揃って眠っており，なんとも息の合ったメンバーだと感心したものである。健康管理についても，各自が節度ある行動を取ってくれていたことから，引率教員としても非常に安心感があった。実際，深刻な体調不良の訴えは皆無であった。

世界中から多くの観光客が訪れるシェムリアプは，若い女性を魅了するものに事欠かない。買い物，美味しい食事，エステサロン，ネイルサロン，おしゃれなカフェなど，学生たちが望めば業務後の時間を遊びに費やすことも可能であった。ホテルから少し歩けば繁華街に出ることも容易である。しかし，今年度の参加学生からは，繁華街で遊びたいという要望はほとんど聞かれなかった。非日常的な娯楽の装置を必要としないということは，仲間と過ごす日常の時間に満足しているのだろうと私は考えていた（写真 2）。帰国後，金沢大学と公立小松大学とそれぞれ別のキャンパスでの生活が始まるが，8名の参加者が今後も交流を続け，お互いに刺激を与え合う存在であり続けて欲しいと強く願っている。

写真 2. お世話になったショッピングモールにて

私自身，本事業を通じて，キャンパスでは気づくことの出来なかった参加学生の長所や魅力を知ることができた。キャンパスとは異なる環境で学生と同じ時間を過ごすことで，教員は学生のことをより多面的に理解することができると感じている。地域の住民や子ども達の中に自然と溶け込んでゆき，心を開かせる適応能力，自分の考えや疑問点を試行錯誤しながら伝えようと工夫するコミュニケーション能力には，感心するばかりか私自身学ぶところが多かった（写真 3)。改めて，学生に様々な文脈の中で学ぶ機会を提供することが，いかに学生の長所を引き出すために重要であることを実感した。公立小松大学は，学生生活を広く町全体で展開する“まちなかキャンパス”づくりを推進しており，学内外での学生の活躍の場の充実を進めている。このポリシーによって，多様な個性を持つ学生それぞれの能力が在学中に沢山開花するだろうことを，本インターンシップを通して実感した次第である。

写真 3. ロヴィア村の子どもたちと

これまでの引率業務を通じて，学生が帰国した後のアフター・ケアの重要性を強く感じている。海外インターンシップからの帰国後は，2 週間の外国での滞在と業務体験によって，自分自身の今後の課題，今後の希望が明確なものとなっていると考えられる。現地で感じた悔しさや嬉しさ，感動の経験が鮮やかに残っている時期には，カンボジアについての更なる学習の継続や英語学習に対して特にモチベーションが高い状態に置かれていると考えられる。学生が抱いて帰国した希望や，やる気を形にするため，今後どのような具体的な取り組みが可能であるか，次に設定すべき目標と目標を達成するために取り組むべき学習内容は何かについて，大学の教員・職員が学生と共に考え，次の選択肢を提示することが出来れば，帰国後の学生のさらなる成長につなげることが出来ると考えている。この点については，是非とも検討を続けたいと考えている。

今年度も無事に，そして，学生達にとっては良い思い出を沢山お土産にしてプログラムを完了することができた（写真 4)。最後に，本事業への本学学生の参加のためにご尽力をいただいた関係諸氏に改めて深謝申し上げるとともに，世界遺産でのインターンシップという稀有なプログラムが，末永く継続できるよう，本事業への変わらぬご支援を心からお願い申し上げる次第である。

写真 4. 修了証書の授与

４．インターンシップ参加学生の報告

1）アンコールインターンシップで学んだこと

公立小松大学保健医療学部看護学科１年　横井菜美（グループ 1）

8 月 18 日から 9 月 2 日までの 2 週間，アンコール遺跡整備公団のインターンシップに参加した。私は自国とは違った文化や生活，環境にとても興味があった。アンコール遺跡群は今も実生活の場として使われており，そこに住んでいる人々はどのような服を着て，家に住み，食事をしているのかを実際に現地へ行って体感したいというのが今回のインターンシップに応募した一番の理由である。私は看護師を目指しており，日常生活にはもちろん看護師にとってコミュニケイションはとても大事な要素であるので，この 4 年間で国籍，年齢，性別問わず様々な人と良いコミュニケイションがとれるような人になりたいという思いも応募したもう一つの要因である。

海外に行くのは今回がオーストラリアに続く 2 回目であったがインターンシップに参加するのは初めてであり，不安と期待で胸がいっぱいであった。カンボジアに行くということを家族や友達に伝えた時，みんなの中ではカンボジアはあまり良い印象ではなかったみたいで少し悲しい気持ちになった。しかしカンボジアの人々はとてもあたたかく，ごはんもおいしくて最高の国であるということをみんなに広めていきたい。

まず，カンボジアについての第一印象はバイクである。カンボジアの交通はバイクが主流で日本に比べ自動車の割合が非常に低く，そのバイクの中には 5 人以上もの人が乗っているものもありとても驚いた。これは道路の状態があまり良好ではなく，交通規制がスムーズに行われていないということなどが原因としてあげられる。私も実際にアプサラ公団の方のバイクに乗せていただいた。うまくバランスがとれるか不安であったがその不安は全く不要であり，風が気持ちよく，今まで乗った乗り物の中で最も楽しいと感じた。日本に帰った今でもバイクに乗りたいという気持ちを抑えきれないほどである。観光客としてきた人々は移動手段として主にトゥクトゥクを用いる。トゥクトゥクとはバイクの後ろに荷台がついており，そこに人が 4 人座れるようになっている乗り物である。運賃は正確に決まっていないので，あらかじめ目安となる値段を知っておき値段交渉をすることが必要である。

ショッピングモールはきれいで雰囲気は日本とそこまで変わらなかった。唯一違うと感じたところは果物が豊富に店頭にあることである。大量のマンゴーや木からもぎ取ったままのバナナが房ごと売られていたり，今まで見たことも食べたこともないマンゴスチンやランブータン，龍眼などが沢山売られていたりした。しかし市場で売られている果物のほうがさらにおいしい。市場とはトタン掛けの簡易市場であり，主に現地の人が生活するのに必要なものが売られている場所である。売られているものの詳しい内容としては，パンや野菜，果物，肉，魚などの食品や，衣類やキッチン用品などの生活用品である。肉や魚は生のままで冷やすことなく売られており，独特なにおいがした。市場の衛生管理はあまり良くないと

感じた。

村に住んでいる人々は皆優しくて暖かく，かごの編み方を教えてくれたり仕事の内容を見せてくれたりして，言語の壁があっても仲良くなることが出来た。子供たちは人懐っこくて初対面の私たちにもたくさんちょっかいをかけてきてくれた。これは村の人々みんなが子供たちをかわいがり，大事にしている証拠であると感じてほっこりした（写真 1)。

写真 1. なついてくれた村の子供

カンボジアの民家は高床式住居で 1 階ではニワトリなどを飼育し，2 階では人が生活する仕組みになっている。床と屋根の脇の方にわざと隙間を作ることで湿気や熱気を逃がすことが出来るという古代の人々の知恵を受け継いでいる。実際に高床式住居に上らせていただくとクーラーも扇風機もないのにもかかわらず，とても涼しくて快適であった（写真 2)。また，カンボジアではトイレの重視度が低く，洪水時の感染症問題が深刻であることからトイレの重要性を伝えるプロジェクト等が行われている。トイレ設備が整っている日本に住んでいる私にとってはトイレがないことはとても衝撃的なことであったが，もともとトイレがないカンボジアの人々にとっては無くても良い存在であることがわかり改めてカンボジアとの違いを感じるとともにトイレが必要な理由を知ってもらうことと経済的な余裕を作れるような取り組みが必要であると思った。

写真 2. 高床式住居で涼む

ホテルはトイレもシャワーもあり不自由なことはなく，快適に過ごすことが出来た。食事は私の口にとても合っておりとても食べやすかった。特にココナッツミルクを使ったアモックはとてもまろやかな味で次から次へと口に運んでしまった。また，フレッシュな果物で作られたシェイクは暑くて疲れた私の体を癒してくれ，食事のたびに頼んでいた。カエルも初めて食べたが，身が締まっていてとてもおいしかった。

遺跡は石が隙間なく積み上げられていたり，壁に細かい絵が彫られていたりしていて，古代の人々の繊細さが感じられた。それに比べ全体の大きさはかなりの迫力があり，何度見ても感動することが出来た。また，それぞれのお寺には個性があり屋根から木が生えているものや色が灰色のもの，茶色のものなど様々なお寺をめぐることがとても楽しかった。壁画を彫る際，一度でも間違えたら壁ごと作り直さなければならず，失敗は許されないのでとても

繊細で大変な作業であったことが分かった。そこまでしてお寺を作る人々はそれだけ信仰心が強かったのであろうという，古代の人々と宗教との結びつきも感じることが出来た。絵の内容としては，当時の人々の生活であったり，乳海攪拌の物語であったりと分かりやすくてずっと見ていたいほど面白かった。

アプサラ公団での業務は，4 つのグループに分かれてそれぞれの専門について学んだ。4 つのグループが別々の場所にいくことも何度かあり，それが終わるたびにお互いの話を聞きあうのがとても楽しみであった。

これから私が担当した西バライについて書きたいと思う。バライは貯水所を意味しており西バライ，北バライ，南バライ，東バライの 4 つがある。西バライは 4 つの中で最も大きくて重要なバライである。東西が 8 キロ，南北が 2.2 キロに広がり 56 億立方メートルもの水をためることが出来る。そんな西バライの機能は主に住民への水の供給，灌漑用水，お寺の地盤の保持，洪水の制御の 4 つである。住民への水の供給はアウトレットゲイトと呼ばれる水門によって管理されており，雨季にバライにためた水を乾季に使用するという仕組みとなっている。お寺の地盤の保持は，乾燥した砂は崩れやすくお寺を守るために水が必要不可欠であることを意味している。そのほかにも動物たちの生息地にもなっている（写真 3)。

写真 3. 西バライのバッファローの群れ

バライは現地ではダイクと呼ばれる堤防によって囲まれている。西バライの堤防は 11 世紀ごろに古代の人々の手によって作られ，今でもそれが残っていることはとてもすごいことであると思った。バライは周りの土を徐々に積み上げていくことによって完成するので，バライの中にためられている水の水位は周りの地面よりも高くなっている。これによって機械や電気を使わなくても，門を開けるだけで簡単に水を移動させることが出来る。現在，住民に水を供給するための門や洪水を防ぐために作られたスピルウェイなどはコンクリートによって補強されているがそれ以外は元のダイクの素材と同じ土を使用して補強している。しかしダイクの浸食がひどく，それを埋め立ててまた浸食が起こるのを防ぐための植物を植えることが課題となっている。このように古代の人の知恵を大切にしながらも住民を守ろうと策を考えるアプサラ公団の人々に心を打たれた。

最後に，私はあまり英語が得意ではなく上手にコミュニケイションがとれるのかとても不安であった。インターンシップ初期のころはお互いが母国語でないということもあり，言いたいことや質問したいことがあってもどのような単語をどのように使えばよいのかわからず，焦ってしまって会話が詰まってしまうことも多々あった。しかしアプサラ公団の方々はしっかりと私の言葉を聞こうとして下さり，同じグループであった七海さんや先生方の

おかげで何とか乗り切ることが出来た（写真 4)。インターンシップ期間の後半に入ると，よく使う単語などもつかむことが出来てより会話しやすくなった。児童養護施設に行ったときにあまり英語を話すことが出来ない子供と出会った。しかしその子はどうにかして自分の気持ちを伝えようと身振り手振りで表現してくれた。そのほかにもみんなで歌を歌ったりしてとても心が温かくなった。

写真 4. ディスカッション

この時，よいコミュニケイションにおいて，スムーズに会話を進めることだけではなく，たとえ言葉は通じなかったとしてもお互いが相手の気持ちを理解しようとすることも大切であると思った。

このインターンシップを通して様々な人と出会い，業務だけでなくたくさんのことを学ぶことが出来た。特に一緒に参加したメンバーは，英語がペラペラであったり，冷静であったり，コミュニケイション能力が高かったりと尊敬するところがたくさんあって私にもっと努力をする活力をくれた。塚脇先生，木村先生，運転手のペンさん，アプサラ公団の方々，そしてメンバーのみんな，本当にありがとうございました。

2）アンコールインターンシップを終えて

金沢大学人間社会学域学校教育学類２年　村井七海（ななみ）（グループ１）

８月 18 日から９月２日までの２週間，私はカンボジアで，アンコール遺跡整備公団（アプサラ公団）のインターンシップに参加しました。今回，人生で初めて飛行機に乗り，海外へ行き，インターンシップに参加し，目に映る何もかもが新しくて魅力的でした。

私が今回このインターンシップに参加したのは，まず，アンコール遺跡群という大変有名な世界遺産に関わる仕事をする機会はめったにないと思ったからです。海外へ行ったこともなければ英語が得意なわけでもなく，さらにコミュニケーション能力が高いわけでもない私ですが，何か新しいことに挑戦したい，このチャンスを逃したくない，と応募を決めました。また，私は社会科の教師を目指しており，大学生の間に様々な場所を訪れたいと思っていたため，このインターンシップは絶好の機会だと思いました。

私たちがインターンシップとして参加させていただいたのは，アプサラ公団というカンボジア国内の，アンコール遺跡の管理団体の水管理の部門です。カンボジアには雨季と乾季があり，雨季に降った雨水を，いかに乾季に利用するかが非常に重要になってきます。アンコール遺跡群の中には「バライ」と呼ばれる人工水域があり，私たちのグループは，その中でも最大である「西バライ」について詳しく学びました。

業務初日に，西バライ（写真 1）の歴史や仕組みについて理解を深めました。バライは，ダムのように水をためておくことが出来る貯水地です。しかし現代作られたダムとは違い，11 世紀ごろに作られたものです。電気や機械のない時代に，人の手で，周りの土を集めて土手が周囲に作られました。シェムリアップの土地は，北東から南西にかけて緩やかな傾斜となっています。このように傾斜した土地を利用して，ゲートを上げればすぐに水が流れ出るようになっています。つまり，ため池と違って，ためた水をポンプなどの機械でくみ上げる必要がなく，電気も機械も使わずに自然に水を流れさせることが出来るのです。

写真 1．西バライ

そんなバライにはいくつか役割があります。まず，遺跡の地盤を強くすることです。遺跡の地盤は主に砂でできていて，砂はそのままだと強くはありませんが，水を含むことによって強い地盤へと変化します。バライで水の量を調整することにより，遺跡の地盤を強くし，数多くの遺跡を守ることが出来ます。次に，コメの栽培のために，灌漑設備を整えることです。シェムリアップ川の下流には広大な農地があります。その農地に水を隅々までいきわた

らせるには，バライによって水の量を管理し，水を必要な場所に適切な量供給することが大切です。バライの重要な役割の一つです。最後に，洪水を防ぐということです。川の水の量が増えたときに，川が氾濫してしまっては，人々の生活に支障をきたしてしまいますし，寺院や遺跡にも大きな影響を与えてしまいます。バライに，必要以上に川に増えた水を流し込み，ためておくことで，洪水を防ぐことが出来ます。

また，私たちグループ 1 は，西バライの中心にあるお寺であるメボンに行きました。メボンは，一説によると，水位を計る指標になっていたといわれているそうです。現在はフランスのチームによってもともとの姿に戻すため修復中です。メボンでは，地元の人々が，様々な楽器を使ってブッダに祈りをささげていました（写真 2）。

写真 2. メボンで出会った少女

業務では，他にもカンボジアの伝統建築であるクメールハビタットについて学びました。カンボジアの家の特徴は，暑さをしのぐため，高床式になっていることです。地面と床との距離は 2 メートルほどあり，訪れた村の住人がそこで休んでいたり，家事や仕事を行っていたりしました。高床式にして，日陰を作るこの様式は，カンボジアの暑い気候に非常に適しているのです。しかし，ある村では，高床式の伝統的な家が立ち並ぶ中，鉄筋コンクリートの家も見受けられました。それは，景観を乱すだけでなく，暑い気候に適しておらず，クーラーが必ず必要になる家です。新しい家の形を誇示するかのように建てられているように感じ，少し残念に思いました。近代化が進む中で，伝統の気候に合った建築を残すことも大切だと考えるようになりました。

また，今回私が大変興味を持っていたことの一つである遺跡もたくさんめぐりました。アンコール・ワットやアンコール・トム，そしてタ・プローム遺跡（写真 3）やバイヨン遺跡などの有名な遺跡をはじめ，アンコール遺跡の中のたくさんの遺跡を訪れることが出来ました。アンコール・ワットは言うまでもなく壮大で，荘厳で，遠くから見ても迫力がありましたが，近づくにつれその大きさにさらに圧倒されました。中に入ってみると，たくさんの彫刻が石の壁に施されており，アプサラ公団の職員の方が，その壁画のストーリーを教えてくださいました。例えば，東の面には，火あぶりやはりつけなどの壮絶な地獄絵がかいてある天国と地獄のレリーフがあります。

写真 3. タ・プローム寺院

西面には，インドの二大古典叙事詩「マハーバーラタ」や「ラーマーヤナ」が絵巻物のように彫られていました。すごく壮大なアンコール・ワットが，繊細なレリーフで埋め尽くされていることに感動しました。タ・プロームでは，樹木が遺跡に複雑に絡まっており，とても幻想的でした。人間が古代に作ったものと，豊かな自然が混ざり合っていて，とても神秘的でした。バイヨン遺跡は，岩山のようにそびえたつ巨大遺跡です。アンコール・ワットのレリーフとはまた違い，バイヨン遺跡のレリーフは，当時の生活を描いており，何のレリーフなのか，非常に分かりやすかったです。どの遺跡もそれぞれ魅力があり，大変良い経験になりました。

業務以外の時間や，休日には，トンレサップ湖のクルーズや，マーケットやスーパーでの買い物を楽しみました（写真4)。クルーズでは，水上で生活している人々の様子を観察することや，水上にあるお店で買い物をすることが出来ました。買い物をするとき，様々な場面で値切りの交渉をする文化が非常に面白いと思いました。悲しい顔をして値切ってもらう子もいれば，威圧して値切ってもらう子もいて，皆，どう値切るかを真剣に考えながら，お店の人とコミュニケーションをとるのがすごく楽しかったです。カンボジアの人々は，みなあたたかく，いつも素敵な笑顔で話をしているところが印象的でした。トゥクトゥクに乗った時や，お店で買い物するときは，日本語で一生懸命話しかけてくれるお店の人もいて，とても居心地の良い国だと思いました。気さくで明るく，おおらかな国民性で，すごくあたたかく感じました。

写真 4. 地元の市場

休日には，ほかにも，遺跡を象に乗って一周したり，蛇を首に巻いたりしました。象は思った以上に揺れて，落ちてしまわないか少し怖かったです。蛇を首に巻くことは一度してみたいと思っていたので，すごく新鮮でワクワクしました。カンボジアにはたくさんの動物がいて，牛や水牛，サルの真横をバイクで通ったり，いたるところに鶏が歩いていたり，日本ではなかなか見られない光景を見ることが出来ました。また，人生で初めてカエルを食べました。足の形が結構はっきりしていて，見た目はカエルそのものでしたが，においと味は照り焼きチキンのようで，大変おいしかったです。カンボジアで食べた物は，何を食べても美味しかったです。ロックラックや，アモックなど，伝統料理はもちろん，毎食のフルーツシェイクは欠かせませんでした。マンゴーシェイクやココナッツシェイクなど，カンボジア産の南国フルーツのフレッシュなジュースやシェイクがどこに行っても飲むことが出来ました。マンゴスチンなど，日本でなかなか食べる機会が少ないフルーツも食べることが出来ました。みんなで食べるご飯は本当に楽しく，おいしく，少し業務で疲れていても，すぐにその疲れが吹き飛びました。

今回のインターンシップでは，業務中もそうですが，業務以外の時間にもたくさんの新しいことを学び，吸収することが出来ました。そしてカンボジアにますます興味を持ちました。このインターンシップへの参加を迷っているときは，カンボジアは発展途上国で，治安が不安であるとか，国民性は大丈夫なのだろうかとたくさんのことを心配していました。しかし，カンボジアに滞在してからは，実際に訪れてみないとわからないことだらけだということを痛感しました。都市部は特に近代化が進んでおり，クメール語だけでなく英語が飛び交っていました。治安や地雷のことに関しても，心配することはほぼありませんでした。

今回，このインターンシップで，公団の人をはじめ，訪れた村の人や，たくさん話したお店の人，ホテルの従業員の方など，カンボジアでたくさんの出会いがありました（写真 5）。このインターンシップに参加していなければ出会えなかった人たちや，知ることが出来なかったことが数えきれないくらいあります。ただの良い思い出で終わらないよう，ご縁があってこのようにカンボジアに興味を持つことが出来たので，これからの自分の学びにつなげていこうと思います。今回のインターンシップの期間を，大好きな仲間と過ごすことが出来て心から良かったと思います。これからも塚脇先生に教えていただいた「愛嬌と低姿勢」という言葉を忘れず，今回得た経験を生かして，何事にも挑戦したいと思っています。アプサラ公団の方々，塚脇先生，木村先生，チューターのはにみおさん，たくさん協力をしていただき本当にありがとうございました。

写真 5．アプサラ公団の方々

3）カンボジアでの学び

公立小松大学国際文化交流学部 1 年　大御悠瑠花（おおみはるか）（グループ 2）

8 月 18 日から 9 月 2 日までの間，カンボジア国立アンコール遺跡整備公団でのインターンシップに参加した。自分にとってはカンボジアを訪れることも，インターンシップに参加することも初めての経験であった。現地では，インターンシップを通してアンコール地域の現状と課題を学んだ。また，2 週間生活する中でカンボジアの暮らしや，雰囲気も感じることができた。日本とは違う環境で，有意義な時間を過ごすことができた。

報告書の構成は，志望動機，業務内容，暮らし，学びとなっている。私がこのインターンシップに参加した動機は，大きく 3 つある。まず，「海外に行きたい！」という気持ちが第一にあったからだ。大学に入って一番早い海外事業だったため，海外に興味を抱いていた私はこのチャンスを是非ともつかみたいと考えていた。次に，カンボジアという国に興味をもっていたからだ。日本のメディアなどから見えるカンボジアは，「貧しい」「かわいそう」などと無意識に思ってしまう国であった。先進国の日本に対し，カンボジアは発展途上国である。日本で生活しているとカンボジアの暮らしは身近には感じず，想像もつかなかった。そのため，実際に現地に行ってみることで，カンボジアの良くも悪くもリアルな現状が見られると考えていた。最後に，自分の英語力を伸ばしたいと思っていたからだ。インターンシップ先で英語を使うことで実際に「使われる」英語を経験できると考えていた。働くうえで，お互いに共有することを英語でやり取りすることは，今までにない経験であり面白そうだと思っていた。

今回私たちがインターンシップを行ったアプサラ公団は，アンコール世界遺産を維持管理する国内組織である。公団には数多くの部門があり，私たちは，その中の水管理の部門に所属した。シェムリアップ，そしてアンコール遺跡にとっては，水は非常に重要な存在である。それは，アンコール遺跡がバライという貯水池の水に守られ，人々は生活するうえで水が必要不可欠であるからだ。しかし，カンボジアの気候には雨季と乾季があり，一年間の水位の変化が大きい。よって，他の気候地域と比べて，干ばつや洪水が起きやすい環境にある。丁度いい水の供給を，アンコール遺跡やシェムリアップの住民に届けるため，公団が水管理に努めている。

写真 1. 北バライ

業務では，西バライ，北バライ，ルンタエク・エコビレッジ，クメールハビタットの 4 か所を各グループが担当した。私は，北バライを担当したが，全てのグループの担当現場の業務も経験できた。担当した北バライは，アンコール・トム

の北東に位置し，中心にニャック・ポワンという寺院が存在する。北バライは別名ジャヤタタカと言われ，「ジャヤ」が作った王の名前であり，「タタカ」がバライという意味である。アンコール遺跡の中には，作った王の名前がそのまま使われているバライや道が多くあった。北バライの中心にあるニャック・ポワンまでは，一つの橋を渡っていく。水が透き通っており，別空間へと行ってしまうような雰囲気があった。その雰囲気が好評で，観光客にも人気のスポットになっている（写真 1)。

北バライは，12 世紀に作られた縦 960 メートル，横 3,600 メートルの大きなバライである。真ん中に 5 つの池をもつニャック・ポワンという寺院がある。バライの水は，クーレン山という標高 487 メートルの山が源となっている。山の水は，山からゲートを通ってバライに流れ込み，最後はシェムリアップの街に供給される。バライのアンコール地域における役割は，地下水の蓄え，住民に水を供給する，灌漑を行う，洪水を防ぐ，観光に役立てるなどだ。その中でも，とくに地下水の蓄えはアンコール地域にとって不可欠である。その理由は，アンコール地域の土壌は水に湿っている状態が一番安定するからだ。アンコール地域の土壌は，ラテライトという赤っぽい土でできている。ラテライトは，湿っていると土壌が安定し，乾燥すると土壌がカチカチになって安定しない。そのため，バライの水が寺院の土台である土壌を常に湿らせることで建物の崩壊を防いでいる。

北バライ以外にも，様々な場へ行くことができた。その中で，クメールハビタットというクメール建築の歴史について学べる場所に行った。カンボジアの住居は，木造で高床の作りである特徴があり，それらの建築をまとめてクメール建築と呼ぶ。クメール建築は，歴史の流れから 5 つの種類ができた。シンプルなものもあれば，凝ったデザインの建築もあった。歴史の中で，屋根が少しずつ変化し，高さが低くなっていった。町を歩いても目にする住居は，全て高床式住居であった。家によってデザインは違うが，カンボジアの気候に適した建築であると感じた。

次に，ルンタエク・エコビレッジについてである。ルンタエク・エコビレッジとは，ルンタエクにある人の手によって作られた一つの村のことである。カンボジアは人口が年々増加しており，アンコール地域に住む人口を他の区域に移動させる取り組みがあった。その移動先として，ルンタエク・エコビレッジができた。村には，子供たちが通う学校も寺院もあり，一つの村として機能している様子であった。取り組みが始まったころは，村の機能が成り立たないような土地であったという。住民が住み始め，そこで育った子供たちが自分の村に誇りをもって生活するようになり，ようやく村として安定した生活を送るようになったという。村では観光客向けに，村の生活を体験できる観光業も行っていると聞いた。これからも，この村が続いていく村であってほしいと願う。

カンボジアでの生活は，不自由なく過ごすことができた。ホテルの近くにはコンビニやショッピングモールがあり，日本と変わらず買い物も困ることはなかった。道路を渡るときは，車やバイクが少なくなった時に周りをよく見て歩くことで渡ることができた。はじめは渡ることが怖かったが，帰るころには慣れていて自分でも驚いた。カンボジアでは，多くの人

がモーターバイクを利用しており，業務先に行くときも公団の方のバイクの後ろに乗せてもらった。信号がついていない道がほとんどで，少し怖かったがこれもすぐに慣れ，朝の楽しみの一つになっていた。

2 週間の中でメンバーのみんなと食べるご飯もとても楽しかった。カンボジア料理や中華料理，西洋料理など様々な国の料理を食べた。カンボジアのご飯はとても美味しく，日本人の味覚に合っていると感じた。たまにオーダーと違う料理がでてくることもあったが，それも許してしまう愛嬌がカンボジアの人には感じられた。また，人生で初めてカエルを料理として食べた。見た目は，カエルのままであるため躊躇したが食べてみると，柔らかい鶏肉のような食感であり美味しかった。

業務以外の時間や休日は，トンレサップ湖に行ったり，ショッピングやネイルを楽しんだり，象に乗って遺跡を一周したりするなど，観光客としてカンボジアを楽しむことができた。また，現地の児童養護施設を訪問する機会もいただいた。施設にいる子供はほとんどが 10 代後半だったため，大きな輪を作っていろいろな話を英語ですることで交流できた（写真 2)。私が話した子供たちは，教師になる，警察になる，ガイドになるなど将来の夢が明確であり，話を聞きながらいい刺激をもらった。また，終盤にはみんなで日本の歌を歌って過ごした。日本の歌から日本文化と触れ合っていると知って嬉しく感じた。カンボジアでは児童養護施設以外でも，多くの子供と出逢ったが，どの子供もまっすぐで素直な目で私と目を合わせてくれた。カンボジア人の優しさの根底が育まれているのだと感じた。

写真 2. 施設の子供たちとの交流

カンボジアで 2 週間過ごしていると，生活や文化や環境について多くの発見があった。インターンシップを通していくつかの市場を訪れたが，地域によって雰囲気や衛生環境の違いがあった。ある市場は，大きな屋根の中でたくさんの店がぎゅうぎゅうに立ち並んでおり，いったん入ると迷子になってしまいそうな様子であった。またある市場は，外に店が立ち並びお店の人が談笑しながら売っているなど，開放的な雰囲気があった。食品売り場では，肉や魚などが常温で生のままで売られており，日本との衛生観念の違いを感じた。

写真 3. 村の子供たちと

村の人々は，幼い子供をあやしたり，食材を売買したり，魚の罠を編み物のよ

うに作ったりして過ごしていた。初めて訪れる私たちに対しても，編み物の編み方を教えてくれることや，カメラのレンズに笑顔を見せてくれるなど，穏やかで温かい雰囲気を感じた。子供たちは，大きな集団を作って遊びを楽しんでいた。私たちとも，抱っこしたり，ハイタッチをしたり，写真を撮ったりするなどして一緒に遊んだ（写真 3)。人懐っこく，純粋で元気な子たちばかりでとても癒された。村には，野良の犬や猫，農業用や食用の牛や鶏など多くの動物も過ごしており，村全体が一つの社会になっているのだと感じた。実際に村に行き，村の人々と関わる機会は，このインターンシップでなければなかなか体験できないことである。カンボジアの村の様子を感じることができて良い経験であったと思う。

カンボジアの様々な場を視察すると，一つの都市でも場によって雰囲気が大きく変わっていることに気が付いた。観光地として発達している地域では，近くに大きなホテルや飲食店が立ち並んでいた。観光客に商売をしている人たちは，クメール語以外にも多くの言語を話していた。一方で，少し観光地から離れた場所に行くと，草原や水田が広がり，道路も整備されていない土の道路がほとんどで，人々は，クメール語だけを話し生活していた。都市と村ではこれほど違うのかと驚いた。この差を格差と言っていいのかはわからなかったが，場所によって環境がかなり違っていることが分かった。

今回のアンコール遺跡整備公団インターンシップに参加し，このインターンシップでしか経験できないようなことをたくさん経験した。カンボジアで過ごす中で，現地の方の優しさや温かさが強く印象に残っている。村を訪ねたときは，言葉の通じない私たちにも微笑んでくれ，温かく迎えてくれた。お店の人も客引きのためということもあるが，知っている日本語を使って笑顔で話しかけてくれた。公団の方々は，私たちに伝わるように丁寧に業務を教えてくれた。お互いにネイティブではないため，発音の違いから理解が難しいこともあったが，その時はジェスチャーや絵を描くことでお互いに理解をはかれた。自然とまた一緒に業務をしたいと思える職場であった。インターンシップを通して，日本以外の働く環境を経験した。そこでは，いい意味でリラックスした雰囲気を感じた。今までの「働く」イメージが変わり，今後の自分に活きてくると感じた。

最後に，このインターンシップを無事に終えることができたのは，きめ細かな指導をしてくださった塚脇先生，木村先生，チューターの未緒さん，安全に送迎してくださった運転手のペンさん，受け入れてくれたアプサラ公団の皆さん，送り出してくれた家族，そして楽しく過ごした 7 人の仲間のおかげである。心から感謝したいと思う。オークンチュラン（写真 4)。

写真 4. 公団の方々との最後の食事

4）カンボジアでのインターンシップを終えて

金沢大学人間社会学域国際学類 2 年　田中日菜向（グループ 2）

約 2 週間（8 月 18 日～9 月 2 日），カンボジアのシェムリアップを拠点に，アンコール遺跡整備公団であるアプサラ公団の方々にお世話になりながら，インターンシップに参加してきました。この 2 週間はあっという間でしたが，一日一日が濃くとても充実していました。また，発展途上国や東南アジアに対して抱いていたイメージが大きく変わった経験でもありました。私がこのインターンシップへの参加を決意したのは，国際学類の講義で昨年参加された方々によるプレゼンを聞いたことがきっかけでした。有名なアンコール・ワットやそのほかの遺跡に，観光客としてではなく業務として関わることができるのは，きっと良い経験になるに違いないと感じました。実際にこのインターンシップを終えてみて，多くのことを学び，得ることができ，心から参加してよかったと感じています。

お世話になったアプサラ公団はカンボジアのアンコール遺跡の保全，それらを取り巻く環境の管理などを行っており，その中で私たちは水管理を専門としている部門で業務を行いました。遺跡が密集するシェムリアップは古くから水とともに生きてきた地域で，その恵みを享受するだけでなく，洪水などの水害にいかに対処するかが大きな課題でもありました。シェムリアップは水の根源であるクーレン山を北部に抱いており，そこからシェムリアップ川を通じて，水が街へ流れ込んでいます。水量はタ・ソムにあるウォーターゲートを状況に応じて開け閉めすることで調節されており，そこから 3 つの大きな水路に分かれています。このウォーターゲートができる 2012 年以前は洪水が多発していたそうです。そしてその先は北バライ，西バライといった貯水池や遺跡の周りを廻り，街では人々に生活用水や農業用水を供給して，最終的にはトンレサップ湖に流れ込んでいます。

写真 1. 北バライ

私は業務初日に北バライを視察しました（写真 1）。東西が 960 メートル，南北が 3,600 メートルもの広さがあり，貯水池という名前からは想像できない程広く，まるで海のようでした。その中心にはニャック・ポアンという寺があり，中心に 2 匹の蛇が絡み合っている塔のようなもの，そしてその周りに 4 つの池があります。南の池に水をつかさどる象，北の池に火をつかさどるライオン，東の池に風をつかさどる馬，西の池に大地をつかさどる人の像があります。もともとは 12 世紀にジャヤーヴァルマン 7 世によって，薬を作るために建造されましたが，今は観光地となっており，公団の方々は水位を確認するためによく訪れているそうです。

北バライは地面を掘って造られたのではなく，土手を造り，その中に水を貯めています。なぜかというと，シェムリアップはクーレン山からトンレサップ湖にかけて傾斜になっているため，ゲートの開け閉めのみによる水量調節がよりスムーズに行えるからとのことでした。また，遺跡の保全にとっても水はかけがえのない資源であり，その周囲には，堀のようなもので水が張られています。実は遺跡の下には砂でできた層があり，そこへ水をしみ込ませることで，地盤を安定させているのだそうです。もし，水がなかったら砂の層は固まらず，地盤が緩んでしまうため，遺跡が崩壊してしまう原因につながります。なぜ遺跡の周りに水があるのかと考えたことがなかった私は驚きましたが，それと同時にそのような仕組みが古代より受け継がれてきていることに感心しました。

業務 3 日目には，植林セレモニーに参加してきました（写真 2）。木を植え，土壌を安定させることで洪水や決壊などを防ぐことを目的としており，シェムリアップにおける水管理のための活動の一環で，アプサラ公団だけでなく，現地の警察や環境保護レンジャー，村人たちなど大勢の人が参加していました。この活動から，自然と共生していくことの大切さを改めて学ぶことができました。

写真 2. 植樹

業務日は，主に午前中に視察へ出向き，午後にアプサラ公団のオフィスでフィードバックをするというスケジュールで行われました（写真 3）。2 週目の初日には，全員でアンコール・ワットとクメールのほほえみで有名なバイヨン寺院を訪問しました。アンコール・ワットはとても広く偉大な雰囲気が漂っており，カンボジアで最も有名な場所だけあって，他の遺跡と比べ物にならないほど大勢の観光客が訪れていました。その分人為的な被害も多くあり，壁の彫刻が，触られた摩擦で消えかかっていたり，落書きも見受けられたりしました。今は壁の近くまで近づけないように対策がなされていますが，面積が広い分監視員を配置するにも人件費がかさみ，遺跡自体の老朽化も進んでいるため，遺跡の保全は決して簡単ではないのだということを身をもって感じました。また，世界各国から観光客が訪れるため，マナーの管理も課題となってきます。中には日傘をさして見物する人もおり，狭く混み合う道で通行の妨げになったり，遺跡を傷つけてしまうことも考えられるため，注意喚起が必要なのですが，なかなかすべて

写真 3. ディスカッション

に目が行き届いていない，また徹底した呼びかけができていないのが現状でした。

次にシェムリアップの街中や市場，車から見た外の風景，また，業務 4 日目に訪れた，市街地から少し離れた村で見たこと，感じたことを記したいと思います。東南アジアへの渡航は初めてだったため，見るものすべてが新鮮に映って見えました。まず，交通に関してですが，“バイク”が主流となっていました。老若男女問わずみなバイクを乗りこなし，交差点では車の間を器用にぬいながら走行していて，日本の交通事情とは全く異なっていました。3 人も 4 人も子供を乗せていたり，小学生ほどの子供が一人で乗っているのを見た時にはさすがに驚きました。私たちも業務に向かうときは，公団の方々のバイクの後ろに乗っていきましたが，とても貴重な経験であったと思います。

また，電線がぐるぐる巻きになって垂れ下がり，バーコードのように重なっていたり，車が飛び跳ねるほど道路がでこぼこしているところもありました。先生方のお話では，隣国のタイから電気を送ってもらうための電線で，破損時用の予備が備え付けられているとのことでした。道路は，日本や中国，その他の国が整備していますが，数年で不具合が生じてしまうそうです。日本と比べればまだインフラが十分ではないのだなと感じました。

市場では最も強い衝撃を受けました。特にフルーツが種類豊富で，日本では珍しいドラゴンフルーツやマンゴスチンというものもありました。赤いバナナ，青いバナナもありました。そして，肉や魚は店先にそのまま置いてあり，売り子さんたちがハエを払いながら売っていました。日本の市場を思い浮かべると，魚は氷に付けられ，肉は冷蔵されていますが，ここではそのような設備がまだ整っておらず，衛生知識も不十分なのだと感じました。

しかし，その一方でカフェやお店に入ると，清潔感があり，Wi-Fi も日本より充実しているくらいでした。クメール料理だけでなく，イタリアン，中華，メキシカンなどのレストランやパブストリートなどもあり，イメージしていたカンボジアとは全く異なった部分でもありました。コンビニのようなお店に入ると，日本，韓国，中国，そのほか欧米国といった様々な国の品がありました。

業務 4 日目に訪れた村では，人々は文字通り自然と共生しており，クメールハウスと呼ばれる家で暮らしていました。家の周りにはバナナ，ココナッツ，マンゴー，パパイヤなどの木が植えられ，鶏が駆け回り，犬や猫がお昼寝をしているそばで人々が生活を営んでいました。クメールハウスは，カンボジアの伝統的な住居です。高床式で，東南アジア特有の気候による湿気や暑さを避け，主に睡眠をとるための家で，日中は下でそうめんを作ったり，魚を捕るかごを編むといった仕事をして過ごしています。原始的ではありますが，皆，自分たちのペースで明るく暮らしており，笑顔が絶えず，どこか胸を打つものがありまし

写真 4. 村の子供たち

た。村には子供たちもたくさん暮らしており，帰る頃には抱きついて離れない程仲良くなりました（写真 4)。彼らは村にある，小さな学校のようなところで歌を習い，土の上で元気に遊びながら暮らしていて，どうかこのままたくましく成長してほしいと感じました。

カンボジアでの約 2 週間のインターンシップで本当に多くのことを学ぶことができました。海外に行くたびに，日本から一歩出れば日本での生活や環境，すべてが当たり前ではないということに気づかされるのですが，今回のカンボジアではそれを一番強く感じました。国の発展具合や，幸福度などは何を基準にするかによって変わってくると思います。私たちが発展途上国を訪れた際，日本より遅れていると感じることは当然だと思いますが，日本に近づけることが正しいとは限りません。例えば，村にコンクリートの建物を建て近代的な生活を送ることが彼らの望むことではないでしょう。しかし，インフラの整備だったり，衛生管理，教育や医療の提供など充実させるべき分野は多くあります。先進国にとって，カンボジアの人々が求めていることをしっかりと理解し，それに対応するのが大切なことです。また，援助に頼りきりにならず，いずれは自立していけるようにサポートしていく（実際そのように行われているものもある）ことも重要だと思いました。記憶は少しずつ風化していってしまうものですが，まずこの経験を忘れずにいること，そして友達や家族に話をしてカンボジアについて知ってもらうことがまず私のすべきことだと思います。実際，多くの人が関心を持って話を聞いてくれました。また，日本に帰ってきて生活していても，「カンボジアだったら...」と考えることがよくあります。新聞の国際欄も興味を持って読むようになりました。この経験は私の人生に本当に大きな影響を与えたと思います。これから広く社会や人の役に立てるように，この経験を思い出して頑張っていきたいと思います。

このインターンシップで日々を共にしたメンバーはこれからも大切な友人です。本当に出会えてよかったと思います。また，私たちをサポートし，インターンシップを成功に導いてくださった塚脇先生，木村先生，様々なことを教えてくれ，私たちのお世話をしてくださったアプサラ公団の皆さんに心から感謝しています。また，いつか全員で会えることを願って，終わりとしたいと思います。本当にありがとうございました。オークンチュラン！

5）インターンシップに参加して

公立小松大学国際文化交流学部１年　肥田望来（グループ 3）

8 月 18 日から 9 月 2 日までの約 2 週間，カンボジアのシェムリアップにて，アンコール遺跡整備公団（アプサラ公団）のインターンシップに参加しました。本インターンシップに参加した動機として，以前から自身に限らず多くの人の中で「かわいそう」という言葉とセットになっている途上国の現状を，自分の目で見て感じたいと思い，また旅行客としてではなく現地の現状や問題点を知る方々と関わることの出来るインターンシップ生としてより深く知りたいと思ったため，参加を決意しました。

今年度の本インターンシップには，例年参加している金沢大学の学生 4 名とチューター1 名に加え，今春開学した公立小松大学の学生，私を含む 4 名が参加しました。業務期間中は，金沢大学と公立小松大学から 1 名ずつの 2 人ひと組みの 4 グループに分かれて活動しました。大まかな業務分野として，グループ 1 は西バライ貯水池の環境保全・観光整備事業，グループ 2 は北バライ貯水池の環境保全・観光整備事業，グループ 3 はルンタエク・エコビレッジの整備事業，そしてグループ 4 がカンボジア伝統のクメール建築についてでした。私は大学での事前研修の時から現地住民と交流し生活を見てみたいと思い希望していたグループ 3 で活動することが出来ました。

20 年前，アンコール世界遺産公園エリア内の人口は 1 万人程度でしたが，現在，生活衛生の向上や観光業の振興の結果，約 1 万世帯（平均で一家族につき子供 4～5 人）へと急増しました。そこで世界遺産公園エリア内の人口増加問題に対処すべくカンボジア政府の指導の下に建設された新しい村が，自身の担当地域でもあるルンタエク・エコビレッジです。アプサラ公団はその村に，世界遺産公園エリア内の住民のうち結婚などで新たに家族をつくる人々を対象として移住してもらい，移住者には一世帯につき，宅地やクメール建築の住居と 1 ヘクタールの土地を無償で提供する活動をしています。また農業技術などの指導もしているため，村人はそこで栽培されるモリンガという薬草でつくられた健康サプリメントを日本の企業と協定を組んで専売をしたり，農業だけではなく伝統工芸品などでも生計を立てて暮らしているのだそうです（写真 1）。ちなみにそれらの収入は 100%村人にいくというのも利点のひとつです。

写真 1．伝統工芸品の説明をうける

実際にルンタエク村に行くと，池を村の中心にして円を描いて住居が建てられており，一部の家には「Mango House」や「Banana House」などの名前が書かれた看板も立てられ，

まるでバリ島のようなリゾート地に見えました（写真 2)。アプサラ公団の方になぜこんなにリゾート地のようなのかを尋ねたところ，近年では観光者向けにゲストハウスとして使用されているからであり，確かに世界最大の旅行サイトのトリップアドバイザーにも掲載されていました。現在はその観光客のためにヨガやダンス，料理教室やトレッキングなどのイベントも開催し，その成果から現在は月に 100 人ほどの，主にヨーロッパからの観光客が訪れるそうです。

写真 2. ルンタエク・エコビレッジ

しかしそんな村を一周して韓国と日本（今年 12 月に完成予定）が寄付した小学校や，幼稚園，村人の畑や住居，レストランなどを見て回ったところ，問題点がいくつかあることに気づきました。一つに，村人向けの娯楽施設がほとんどないことであり，それはその村で育った子どもたちはまだしも，世界遺産公園エリア内から移住してきた大人たちには物足りない，つまらないものなのではないかと思いました。また，シェムリアップの街からバイクで片道 1 時間かかる 30 キロの道のりは毎日通うにはあまりにも遠く，必然的に村人が就ける仕事が限られてきたり，子供が中学以上に進学するとなると不便になるという問題点もありました。もし自分がそこに住むとなったらきっと，ルンタエク村の奥さん方がつぶやいていたように「チュガーイ」と言ってしまうだろうと思いました。現実にせっかく移住したけれど，その遠さからまた街に戻る人もいるということでした。

またあまり移住計画が進まない理由として，自分が結婚して新しい家庭をつくるとしても両親や兄弟と離れて暮らしたくないからという人も少なくないようです。日本と違って大家族が一般的なカンボジアならではの問題でありながらも，核家族であるがゆえに両親の老後のお世話や教育と仕事の両立などの面で悩む日本の家庭から見ても共感せざるを得ない問題だと痛感しました。しかしこのようにまだまだ問題が山積みのルンタエク村ですが，子どもたちの中でルンタエク村が「自分の故郷」という思いが芽生えているならば，将来村はより繁栄するのだと信じ，村人のための，子供のための，計画を立てることが不可欠なのだと感じました。

カンボジアでの多くの体験を通して自身に大きく変化をもたらしてくれたこととして，「会話をすること」の重要性と楽しさを知ることが出来たという点があります。会話をしようとすると，質問を考えるために相手に興味を持たざるを得なくなり，相手に興味を持てば，どこかに共感できるところがあり，共感すれば，その人のために動きたいと思えることに気付きました。最終的に他人のために動くことで自分に価値を見出すことにつながるのだろうけれど，「会話をすること」で相手にとっても自分にとっても生きやすい環境を作り出せるのは素晴らしいことだと気付くことが出来ました。また他人との心地よい会話・関係を作

り出すためには，塚脇先生がよくおっしゃっていた「愛嬌と低姿勢」が重要だとつくづく感じました。

その重要性を特に痛感したのは，ナイトマーケットやオールドマーケットなどの市場でした。もともと知らない人との会話が大の苦手だった私にとって，買い物をする際にお店の人と会話して値切る経験など一度もなかったので最初は少し緊張しましたが，強気でいけば大丈夫と思っていました。しかし強気で値段交渉すればするほど，価格は下がるけれどその時のお店の人の悲しそうな不満そうな表情が忘れられなくなりました。それでも多くの人が日本人向けに価格を上げていることは知っていたので，お互い様だと思っていました。

しかし極めつけは，ナイトマーケットのあるお店で可愛いポーチを見ているとき，いつものように強気で値段交渉したけれど他のものもみてどれにするか悩んでいると「これにするの？どれにするの？買うの？買わないの？早く決めて」と言われしまったことでした。結局あまりに高値だったので，他の店に移り，今度は少し会話をして仲良くなって商品をほめてから値段交渉の入ると，想像していたよりもスムーズに交渉が進み，最後にはお互い笑顔で別れることが出来ました。その後，ほかの店でも明るく会話して仲良くなった後に値段交渉する方法をとっていくと，確かに以前より時間はかかるけれど，別れた後も相手の笑顔と会話した内容をよく覚えていることと，もっとも自分自身すごく気分がいいことに気付きました。その会話の中でカンボジア人の面白さや優しさに触れることがより現地を知ることにつながり自分自身の人生を豊かにしているように感じました。しかしながらその国民性は，増加する観光客の高度で時に強引な交渉術に負けることが多く，近年では商売上手なトルコ人を雇っている店もあることを知り，私はそのことにカンボジアがカンボジアではなくなってゆくような不安を覚えました。

写真 3. 村でランチを試食

「会話をすること」の楽しみを実感してから，私は行く先行く先の人々に少しでも話しかけようと努力しました。するとある村では，たまたまお昼ご飯を作っていた村の方に話しかけるとおいしい魚のスープとあったかいご飯を食べさせて頂けたり（写真 3），ロヴィアという村では伝統的なおかし作りを体験させていただいた後に警戒心など全くない

写真 4. 元気な子どもたち

元気な子どもたちに村を案内してもらったり（写真 4）と，より多くの人と関わることができ，自分の目で現地の方々の生活を垣間見ることが出来ました。また 25 日にお会いしてお話させていただいた別所公使ご夫妻の様々なことに興味関心を持たれている姿に感銘を受け自分が少しでも気になったことは分かるまで自分の目で確かめたいとより強く思うようになり，30 日に訪問した児童養護施設で将来の夢などを話し合った男の子の努力と向上心とに感服して現状に甘えていたらダメだと再確認するきっかけになりました。このようにいわゆる先進国の日本人がカンボジア人から学べることはたくさんあるのだと発見できました。

このインターンシップに参加して変わったことのうちもうひとつ紹介するとすれば，現地で住民たちと話す前は，整備されていない道や裸足の子どものすがた（写真 5）を見て「かわいそう」だなと思っていたけれど，今はカンボジアではそれが普通であり不便なこともあるかもしれないけれど哀れではないのだと思っています。また現状として，平均より裕福な生活をしていながらも先入観のある観光客を狙った子どもの物乞い（写真 6）はその子たちが勉強を軽視するようになることに繋がる大きな問題であり，観光客に注意を呼び掛け，自身でも気を付けなければならないと感じました。

写真 5. スコール後の村の小道

人口問題やトイレに関する衛生問題など 2 週間という短い期間でさえ多くの課題が見つかったようにこの国が抱える課題は数えきれないほどあるけれど，先述した良いリーダーたちや良いリーダーになりうる子どもたちが作り上げるカンボジアの未来に私たち外国人が関わっていくということがどのようなことか，海外で仕事をすることがどのようなことかすこしずつ見えてきました。

写真 6. トンレサップ湖で物乞いする子どもたち

最後になりましたが，本インターンシップを企画，指導してくださった金沢大学の塚脇先生，公立小松大学の木村先生，チューターの埴崎さん，アプサラ公団の皆さん，現地で関わってくださった方々，埼玉大学のみなさん，また協働した金沢大学と公立小松大学のみんなに感謝を述べて本インターンシップの報告をしめたいと思います。

6）初めての発展途上国でのインターンシップを終えて

金沢大学人間社会学域国際学類 3 年　小泉奈央（グループ 3）

8 月 18 日から 9 月 2 日までの 2 週間，アンコール遺跡整備公団（以下，アプサラ公団）でのインターンシップに参加した。今まではおもに先進国でのホームステイや青少年海外派遣活動を経験してきたが，今回，初めて発展途上国に降り立った。3 年生の夏休み，皆日本企業の国内インターンシップや長期留学に向けての準備を行っているなか，なぜ私はこの世界遺産でのインターンシップを選んだのか。理由は主に 2 つある。

まず，アンコール世界遺産，といえば岐阜の白川郷のように地域住民が実際に生活している地域全体が世界遺産となっており，そのような地域住民と観光開発の関係性や問題点などに興味があったからだ。全世界からの観光客数が毎年増えていくなかで，カンボジアという発展途上国はどのように対処しているのか，また地域住民は実際どのように感じているのか，ということを自分で見て学びたかった。また，ただ単純に発展途上国に行ってみたかったというのも理由の一つだ。ゼミで国際問題（児童労働，女性の権利，環境問題など）を取り組む中で，必ず問題となっているのは発展途上国だった。それは私たちのような先進国のサポートが必要となってくる問題で，ニュース記事や論文では書かれていないことを何か掴みたかった。

今回は金沢大学から 4 名，公立小松大学から 4 名が参加し，チューターである 4 年生を除くと私が最上級生であったが，他のメンバーとは学年関係なく，言いたいことや気づいたことは何でも共有し合えるいい関係を築けたため，その分学びも深まったと感じた。主に学んだことを 3 点にまとめたいと思う。

まず初めに私のグループの担当である，地域住民支援とルンタエク・エコビレッジについてだ。ルンタエク・エコビレッジはアンコール遺跡群のエリアの外れにある人工的に作られた村である。発展中のアンコールのエリアでは人口増加が問題となっている。子どもが生まれ，その子どもが結婚してまた所帯を持ち子どもを授かる，という風に世帯数も増加している。しかし，遺跡保護の観点からアンコールエリアでの新しい家の建設や増築は禁止されている。そこで新しい世帯をもつ若者達などに向けて整備されているのがルンタエク・エコビレッジである（写真 1）。

写真 1．ルンタエクのゲストハウス

移住する人々には住宅や土地，また農業のため

に 1 ヘクタールの土地も与えられ，収入源として農業（主にモリンガという日本にも輸出される薬の原料となる植物やその他豆類）と観光業（エコビレッジにあるゲストハウス運営や体験活動など）が保証されている。観光業としては，ヨーロッパや中国から Facebook などの SNS を通じての予約が多いそうだ。また，様々な分野のエキスパート（農業，木材，漁業，環境や ISO，水資源，建築）の方々もこのエコビレッジをサポートしている。農業はすべてオーガニックで行われ，ソーラーエナジーも利用されている。アプサラ公団の事務局もこのルンタエク・エコビレッジにあり，人々の活動が円滑に行われているか，観光業や農業での収入は上手くいっているのか，などの管理も行っているが，そのサポートをしているアプサラ公団はこの活動を通じて住民から利益をもらうことはない。また企業も無利子でローンを組むことを許可したり，韓国や日本など先進国が学校を寄付したりするなど，国内外のサポートを得られている。

一見，このエコビレッジには多くの利点があり，住民たちにとっても良いものだと思われるが，実際この計画は難航していることが分かった。業務中に伺った話によると，まずアンコールの中心エリアから距離が遠いことがネックになっているのだという。実際，私たちも業務に就く際，滞在中のホテルから二輪車でルンタエク・エコビレッジに向かったのだが，1 時間 20 分ほどかかった。道が舗装されているところもあれば前日の雨で水浸しになってぬかるんでいる道，またそこら中に穴や段差があるところも多かった。エコビレッジのなかでの収入源が確保されていても，街中での仕事を続けたい人々にとってはルンタエク・エコビレッジでの生活は負担になるということが分かった。また，代々住んできた場所から新しい場所へ移住するのをためらう人が多いのもこのプロジェクトが難航している理由の一つだ。事実，新しい環境になじむことができずに，移住してきたにも関わらず，元に住んでいた場所へ帰ってしまう人々が約 5%いるそうだ。また，移住するための費用がかかるのも住民たちにとっては負担になる。ルンタエク・エコビレッジへの誘致には，新しい環境に慣れ住みやすくするために精神面でも金銭面でもサポートが必要だと強く感じた。

次に，日本で報道されているカンボジアと実際私が見て感じたカンボジアのギャップについて書こうと思う。“カンボジア”と聞くと，テレビを見ていてもテレビ局が村に学校を寄付したり地雷除去のドキュメンタリーを放送したりするなど，主に“貧しい”，“発展途上”，“かわいそう”，といったイメージが日本の中ではあるのだと思う。実際私もカンボジアと聞くと貧しくて生活に困っている，というイメージをもっていたし，祖父母などは未だに紛争などがあるのではないのか，そんな危険な場所に行くな，と言ってきた。また，ニュース記事でもカンボジアの人権問題などを取り上げているところが多い。例えば，私

写真 2. 児童養護施設の子供たち

が読んだ記事の中に“Cambodian's Orphan Business”というものがあり，これはカンボジアで蔓延しているビジネス孤児院を指摘したもので，ビジネス孤児院の子供たちは貧しく，悲しそうな表情を作るように言われている，とも書いてあった。実際，公団の方に聞いてみるとビジネス孤児院のようなものは実在するが，見分けるのは難しいとのことだった。また，孤児院の子供たちはみな貧しい，と記事では言及されていたが，私が訪れた孤児院（児童養護施設）ではみな元気に外で走り回ったり将来の夢を語り合ったりなど，記事が言及しているものとは大きくかけ離れていた（写真 2）。

発展途上国，と聞くと日本のメディアでは主に農村部などのインフラ整備がなっていないところやローカルな市場などが取り上げられがちだ。それを見た日本人は貧しい発展途上国にはファーストフード店などない，と思いがちではないか。確かに，未だにトイレの設備が行き届いてない地域も多く，あまり衛生上“綺麗”とはいえないマーケットも多くある。私もカンボジアに行くまではそのようなところで体調を壊さないのか，“普通”なカフェなどはあるのか，など心配していた。しかし，実際は多くのファーストフード店やスターバックスなどのカフェ，大きなショッピングモールで町はにぎわっていた。街に出てみれば東南アジアではお馴染みのトゥクトゥクが多く走っているが，それと同時に多くのヨーロッパ製の車（BMW，ベンツ，フォルクスワーゲンなど）も走っていた。現在，主に日本のマスメディアで報道されているカンボジアは貧しく，子供たちもかわいそう，といったイメージが強い。しかし，私が見たカンボジアは，数十年前まで紛争や内戦があった土地で開発が進み，人々の生活がより豊かになろうとしている真最中であった。しかしそれと同時に発展途上国の中の貧富の差や，これからグローバリゼーションに伴い，カンボジア独自の文化が失われかける“均一化”が進んでしまう危険性も感じた。

最後に，アンコール遺跡群の観光業とその問題や課題についてだ。私たちは 2 週間の業務の中でアンコール遺跡群を実際に観光客目線で訪れた。自分たちもインターンシップ生としてではなく，観光客として訪れることで様々なことに気づくことができたと思う。周りを見渡せば多くの西洋人やアジア人であふれていた。アプサラ公団の方に聞くと，数年前まではヨーロッパ系の観光客が多かったが，ここ最近では中国人観光客がかなり増えたそうだ。確かに，レストランに入ってもメニューはクメール語と中国語で書かれているものが多かったし，マーケットを歩いていても「ニーハオ」と声をかけられることもあった。しかし，遺跡群を歩いていると中国人観光客の行動が気になった。

写真 3. 観光客の日傘（日差しはほぼない）

中国人を嫌っているわけではないし，同じような行動をとっている日本人もいたので中国人だけを批判しているわけではないが，中国人観光客が増加していることもありこれからさらに対策が

必要だと感じた。例えば，日傘を使用している女性だ（写真 3)。遺跡群の通路などは基本広くはない。場所によっては人がすれ違うのがやっと，というところもある。そんな中で日傘をさしていると，人に危害を与えるだけでなく，遺跡自体も傷つけてしまう可能性がある。また，カラフルな服装が景観を壊しかねないことも問題だ。どんな服を着るかは個人の自由ではあるが，例えばアンコール・ワットの写真を撮ろうとしたときに，真っ赤な服や黄色，ピンクなど派手な色が点在するのはあまりよくないのではないかと思う。古代の遺跡ならではの風合いを感じるのも魅力の一つだと思うのだが，修復作業が不自然に行われている個所なども多々気になる。

また，公認の多言語対応のツアーガイドが主にアンコールのなかで観光客のガイドをしているのだが，このガイドたちもルールを守らないことが多い。特に，遺跡群の中ではマイクは使用禁止になっているそうだが，多くのガイドがマイクを使用していた。さらに不思議に思ったことは，この不正を目の前でアプサラ公団の職員が目撃しているにも関わらず，素通りなのだ。なにか注意するわけでもなく，何事もないかのように通り過ぎていった。村のなかでも家の増設が禁止されているにも関わらず，隠しながら増設をしている家に対しても何も注意などしていなかった。もし，本当にこのようなルールをしっかりと守らせアンコールを保護していくのであれば，アプサラ公団の行政執行力なども問題点となってくるのだろうと強く感じた。

私がこの 2 週間のインターンシップを通じて強く感じたことはルンタエク・エコビレッジを推進していくための課題，マスメディアとのギャップやグローバリゼーション，そしてアプサラ公団の執行力についての 3 つだ。これは私が今現在先進国の恵まれた環境で生活しているからこそ感じる贅沢なのかそれとも本当にカンボジアに必要なことなのかは分からないが，カンボジアの発展とアンコール遺跡群の保護につながるのであれば幸いだ。

写真 4. グループ 3 のメンバー

最後に，隔たりなく関わってくれた個性強めのたくさん食べる公立小松大学の 1 年生，たくさん寝てたくさん笑う，何事も受け入れてくれた金沢大学の 2 年生，そしてこの個性の塊の相手をしてまとめてくださったチューターの方，先生方に心から感謝いたします。ありがとうございました。

7）初めての地，カンボジアでの経験

公立小松大学国際文化交流学部 1 年　土橋香乃（グループ 4）

今回，アンコール遺跡整備公団（アプサラ公団）のインターンシップに約 2 週間参加して，日本では味わえないような充実した日々を送ることができた。たくさんの素敵な人と出会い，様々な“初めて”を経験した。一日一日が驚きと発見の連続だったので，こんなにも刺激のあるインターンシップに参加できて，自分の身になるものが多くあり本当に良かったと心から感じている。

私がこのインターンシップに参加しようと思った動機は 3 つある。まず 1 つ目は，初めての経験をして自分の視野を広げるためだ。私は将来の夢や目標だけでなく，2 年次からの専攻のイメージすらぼんやりとしか描けていない。そこで，カンボジアで価値観を深めて進路のヒントをつかめたら，との思いがあった。2 つ目は，日本以外の国で英語を会話の手段として使い，自分の英語力向上を図るためだ。小学校の高学年から今までずっと英語にふれ，勉強してきたのにも関わらず，使う機会は限られている。さらに，今まで旅行や研修で海外に何度か行っているが，そこでも英語を話すことはほとんどなかった。そのため 2 週間の業務の中で，英語でコミュニケーションをとるという今回のインターンシップは，私にとって挑戦でもあり，同時にすごく魅力も感じたのだ。最後の 3 つ目は，世界遺産であるアンコール遺跡や，その周りで暮らす人たちの生活を自分の目で見てみたい，維持管理に携わりたいと思ったことだ。高校生の時に，世界史の授業でカンボジアの歴史について学び，教科書でアンコール・ワットの写真を見たことが未だに印象的で，そこで興味を持ったのが始まりだった。さらに，大学の講義でカンボジアの国についてより理解を深めたり，授業の一環でカンボジアが直面している問題を調べて解決策を自分で考えたりしているうちに，カンボジアに対する関心がどんどん強まっていった。

アプサラ公団では，グループごとに担当が決められて業務に就いた。私のグループは，カンボジアのコミュニティや暮らしの担当だった。まず，クメール式伝統住居の歴史を知ったり，ジオラマを見たりできるクメール・ハビタットを訪れた（写真 1）。そこでクメールの伝統建築の方法によって建てられた住居について詳しく学んだ。建て方は全部で 5 種類あって，屋根の形によって呼び方が違うのが特徴だ。クメール式伝統住居は木造高床式で，カンボジアの熱帯気候と大きく関係した造り

写真 1. クメール・ハビタット

をしている。上下のフロアがあり，それぞれ違う用途で使われる。下の階はオープンスペースになっており，人々はそこで一日の大半の時間を過ごす。日よけになる上に地面に近いため，とても涼しく過ごしやすい空間になっているのだ。実際に生活している方の家に行ってみると，ハンモックで気持ちよさそうにしている人や，料理をしている人，元気に走り回る子供など，リアルなカンボジアの人々の生活風景を目にすることができた（写真 2）。一方で，上の階は一般的な木造住宅のような造りで壁があるため，寒くないように主に就寝時に利用される。熱帯気候のカンボジアならではの工夫を学び，現地の人々の暮らしぶりを肌で感じ，普段知ることのない独自の生活の知恵を知れたと思う。また，クメール式住居は建物だけでなく，周りの自然も併せてこそ価値のあるものとなる。遺跡の周りも，家の周りもとても自然豊かで，遺跡の景観としてマッチしているように思う。そしてこの景観は，住民や公団の人の手によって守られてきたものである。こうした家は，観光客に本当のクメール式住居を見せるためや，次世代の人に残すためなどといった理由で造られているという。長い時間をかけて作り上げられたアンコール遺跡は，もちろん住居も含めて後世まで残すべき世界遺産だと改めて感じた。だから，公団の人と同じように業務に携われたのは，本当に貴重な経験で嬉しかった。

写真 2. 現地の人の暮らし

しかしこの住居にも問題はいくつかある。かつての古代集落は，くっついているような近い距離に並んでいて，住民同士で水や食べ物を分け合っていた。そのため人と人の距離がとても近く，地域共同体の結びつきも非常に強かった。それが，プライバシー保護の見方が次第に強まって，家と家の間に塀が作られることが多くなったという。これが問題の 1 つとして挙げられる。これによって，住民同士のつながりが今より希薄になってしまうのではないかということが懸念されている。この話を聞いたとき，村の作りが変化していくことはしょうがないことだと思うのと同時に，伝統を受け継いでいく難しさを身に染みて感じた。

カンボジアのアンコール遺跡の大きな特徴は，世界遺産内に人が住んでいるということだ。私は実際に自分の目でその様子を見るまで，世界遺産の中で生活することは住民にとって良いことよりも苦労のほうが多いのではないかと正直思っていた。世界遺産にはたくさんの観光客が足を運ぶため，周辺のごみが増加したり，常に周りに人がいることが精神的にストレスになったりするのではないかなどと，様々なことが思い浮かんだ。しかし村の様子をのぞいてみると，全くと言っていいほど私の想像とは違っていた。そこには，笑顔が溢れていた。業務の中で，古代の暮らしが残るロヴィア村を訪れた際にも感じたが，カンボジア

の人はみんな穏やかでにこにこしている印象がある。そんな村の人たちを見て自然と，私もそうだがここを訪れたすべての人は笑顔になってしまうのだと感じた。話さなくても目が合うと微笑んでくれる現地の人たちの虜になった気がする。カンボジアに来て，公団の人や村の人たちと関わっていくうちに，人の温かさを改めて知ることができた。だから私もカンボジアで，とても心が温かくなった。また，コミュニティと周りのお寺は，お互いになくてはならない存在なのである。コミュニティは，お寺を見守る役目があり，公団の人たちと連携して守っている。反対に，お寺を訪れた観光客が食べ物やお土産を買うことで，コミュニティに利益をもたらす。だからどちらも大切なものなのだと知ることができた。

毎日の業務の終わりにあった，公団の人とのディスカッションでも学ぶことがたくさんあった。初めのほうはカンボジア独特のアクセントもあり，聞き取ることがとても難しかった。さらに，私自身もいざ話そうとすると，単語が出てこなかったり自信がなかったりして言いたいことの半分も伝えられなかった。でも，周りのメンバーが話しているのを見て，聞いて，とりあえず自分の思ったことを言ってみようと思うようになった。向こうの人も私の拙い英語を一生懸命理解しようとしてくれて，少しずつ自信をもって話せるようになった。また，私たちがわからないところがあると，絵を描いて説明してくれることもあったし，何度も聞き取れない単語を言い直してくれたりスペルを書いてくれたりと，とても親切に接してくださった。だから言いたいことが通じるとすごく嬉しくなるし，逆に通じないともっと勉強して伝えられるようになりたいと奮起させられた。そのうちに，話していることもだんだんわかるようになり，質問や感じたことも始まったころより伝えられるようになった。日本にいる今，環境は違うけれど，現地で感じた伝えられないもどかしさと伝えられた喜びの両方を胸に刻んで，英語をもっと身につけたいと思った。話す機会が少ないことを理由にせず，今回のように自分でチャンスを見つけて，日本でもできることをやりたいと思う。

最初にも述べたように，今回のインターンシップでは“初めて”の経験がたくさんあって，どれも思い出深いものである。例えば移動にバイクを使ったこと，毎日のようにシェイクを飲んだこと，領事館に行ってお話をたくさん聞いたこと，トンレサップ湖で船に乗ったこと，象に乗ったこと，そしてアンコール世界遺産に行ったことなど本当にたくさんあり，挙げきれないくらいだ（写真 3）。ホテルでも，みんなとの移動時間もご飯の時間でさえも毎日とても楽しくて，終わってしまうのが寂しいと感じた。正直，カンボジアに出発する前は，期待や楽しみよりも不安のほうがずっと大きかった。2 週間もの間海外で生活することに対しての不

写真 3. トンレサップ湖

安，あまり得意とは言えない英語だけの環境に対する不安などが，出発の日が近づくにつれて押し寄せてきた。しかし，実際に行ってみると不安なんて感じている暇もないくらい，濃い 2 週間を過ごした。4 回目の海外で，改めてコミュニケーションの大切さを思い知らされた。それも，一方通行のコミュニケーションではなく，相互のコミュニケーションが必要なのだと知った。でも，英語が上手ではなくても，文法が間違っていても，とにかくしゃべってみることが 1 番重要だと気付くことができた。私と同じく母国語が英語ではない公団の人に，「I also make mistakes in English. So let's speak!」と言ってもらったことが，今でもとても印象に残っている。この言葉のおかげで，私は間違いを気にせずに話してみようと思えるようになった。今はまだまだ言いたいことを全部伝えることは難しいけど，いつか簡単な言葉ででもすべてを伝え，理解してもらえるようになりたい。

このインターンシップは私にとって，大きな財産となる経験になった（写真 4)。こんなに素敵な経験を 1 年生のうちにできたことは，本当に貴重で，ありがたく思う。2 週間カンボジアにいてカンボジアの良さをたくさん知り，同じアジアでも日本との違いもたくさん発見した。異国の文化に触れたことで視野が広がり，ものの見方が変わった気がする。自分を見つめ直すこともでき，実りの多い活動だったと言える。参加できて，心から良かったと思う。これを機に，もっといろんな国に行って，たくさんの知識を身につけたいという思いが増した。

写真 4. 公団の方々との昼食

最後に，インターンシップの準備から奔走してくださった塚脇先生，木村先生，大学関係者の方々，お世話になった APSARA 公団の方々，チューターの未緒さん，そして一緒にインターンシップに参加した 7 人の仲間には，感謝の気持ちしかない。2 週間本当にありがとうございました。

8）アンコールインターンシップに参加して

金沢大学人間社会学域人文学類 2 年　酒井朋花（グループ 4）

8 月 18 日から 9 月 2 日の 2 週間，アンコール遺跡整備公団インターンシップに参加しました。私がこのインターンシップを知ったのは，金沢大学から定期的に送られてくるアカンサスメールのうちの一通です。普段は速攻で消してしまうことが多いのですが，たまたまカンボジアという単語が見え，気になって開いてみると，なんとも面白そうなことが書いてあり，これは是非とも説明会に行こうと思いました。もうこのメールをもらった時点で行く気満々でした。その後説明会には行きそびれてしまったのですが，私は運よくこのインターンシップの担当である塚脇先生と知り合いで，優しい塚脇先生は個別に説明会を開いてくださり，行く前から感謝がいっぱいです。ありったけの熱意を申し込み用紙にぶつけた結果，見事選考をかいくぐることができ，おめでとうメールが来た時には狂喜乱舞でした。

インターンシップが始まる前，実はとても緊張していました。全く知らない人たちと全く知らない土地で 2 週間も過ごせるのか不安でした。それ以上に心配だったのは英語です。カンボジアの公用語はクメール語で，英語も学校では教えられているので通じることが多いし公団の人たちとの会話は英語になると聞いていたのですが，ちゃんと聞き取れるか，ちゃんと喋れるか，心配でなりませんでした。結果を言いますと，あんまり聞き取れなかったです。カンボジア独特の発音に慣れなくて戸惑いばかりでしたし，カンボジアの人にも日本人的英語は聞き取れないものがあるようで，お互い四苦八苦しながら会話していました。聞き直すたびに私にもっと英語力があればなあと何度も申し訳なく思いましたが，僕も英語は得意じゃないんだ，僕らの英語力はどんどん落ちていく一方だけど君らはこれからどんどん上達できる，頑張れ，と公団の方に励ましてもらってしまって，嬉しいやら情けないやら。もっと英語を頑張ろうと思いました。

業務についてです。今回は 2 人ずつ北バライ，西バライ，エコビレッジ，クメールハビタットの 4 つのチームに分かれ，私は公立小松大学の土橋香乃さんとクメールハビタットのチームになりました。クメールハビタットチームはクメールの伝統住居や暮らしなどを守ろうというチームで，私の専攻にも参考になるような内容でした。まずクメールの伝統住居（写真 1）は，一階が壁のないオープンスペースで出入りが自由，二階が壁のあるプライベートスペースで寝る用。周りには野菜や果物が植えられた庭があり，井戸かため池などの水源があり，鶏や犬などの動物がい

写真 1．伝統的なクメール建築

る，というのが一般的です。

カンボジアの気候は，北陸の夏がジメジメ日陰も暑いのと違って，日陰はとても涼しいので，壁がない一階は風が通って涼しく快適に過ごせます。夜は逆に寒すぎるので二階の壁に守られたスペースで寝ます。二階で寝ることは泥棒や動物に襲われないように，というセキュリティの役割もあります。家々の間には壁がなく比較的自由に行き来でき，泥棒など事件が起きたら隣に駆け込んで助けを求めるなど助け合いがしやすい構造になっているのが伝統的なクメールの村らしいです。それが今はだんだんプライバシーを気にするようになり，柵がある家も少なくないのだとか。簡単で安く建てられるコンクリートの現代的な家も所々立ち始めてしまっているのですが，これらはカンボジアの気候に合わずエアコンがないと暑いし，アンコール遺跡の景観を壊すことにもなるので，アプサラ公団は，観光客にクメール建築を知ってもらうことのほかに，住民にクメール建築の良さを知ってもらって建て方をシェアする，次世代まで伝統様式をつないでいく，ということを意識しているそうです。どんどん長くなってしまうので，もっと語りたい気もしますがカンボジアの生活の話に移ります。

写真 2. 一番美味しかった屋台のチキン

先ほども少し触れましたが，カンボジアの気候はちょうど訪れた時期は雨季で，1 日に数時間雨が降るほかはすっきり快晴です。気温は意外と湿気もあって暑いけど，なぜか日陰はとても涼しいし，エアコンは大抵効きすぎです。カンボジアにいる間，北陸でとうとう 40 度越えもあったらしいのですが，カンボジアの最高気温は 33 度くらいで，ちょっとラッキーだなと思ってしまいました。食べ物はとてもおいしいです。骨つきチキンが最高です。チキンはお店よりも遺跡内の屋台の方がシンプルな味付けで美味しいです（写真 2)。カエルはほぼ鶏肉で美味しいので，忌避せず食べてみてほしいです。あとシェイクが美味しいです。マンゴーシェイクにハズレはないけど，私が一番好きなのはスイカシェイクでした。アマゾンカフェのライチシェイクもおすすめです。

写真 3. 蛇を首に巻いた瞬間

私は一つ目標というか，意識していたことがあって，それはとりあえずなんでもやってみ

るということです。カエルは食べたし，蛇を首に巻いたし（写真 3），辛いソースも酸っぱいソースも舐めて，その辺に生えている草のような香草も食べました。せっかくだからコオロギも食べてみればよかったです。この目標のおかげで，実際の井戸汲みをやらせてもらえたし，その辺にある木の実を食べさせてもらったし（妊婦さんだけが好んで食べる実だそうで，食べられなくないけどすっぱ苦かった），ただの観光客じゃできない色々なことを体験することができました。

最古の村と言われるロヴィア村に行った時は，人々の温かさに驚きました。自分の住んでいるところに知らない団体がやって来て，ジロジロ見て写真を撮って，快く笑顔でおしゃべりできますか？子供達がのびのび遊び，動物たちが自由に歩き回り，ゆったりと時間の流れるこの空間は守っていかなければならないものだと感じました。幼稚園に通う子供たちは警戒心が薄く人懐っこくて，すぐに仲良くなれました。少し恥ずかしそうに抱っこをせがまれて可愛くて仕方がなかったです（写真 4）。

写真 4．人懐っこい子どもたち

インターンシップというものに参加したのは今回が初めてでしたが，このインターンシップだからこその経験がたくさんできました。インターンシップとは就業体験のことですが，就職先の参考にはあまりならないインターンシップかもしれません。なんせカンボジアなので。しかし，働き方について考えさせられました。カンボジアは 7 時～11 時，昼休憩を挟んで，12 時～16 時が定時だそうで，働いている時もどこかのびのびとしています。シェムリアプの空港でのチェック中に談笑している職員さんたちを見たのが最初の衝撃だったかもしれません。日本は効率を求めすぎ，時間に追われすぎだと思いました。今まで普通だと思っていたことを批判的な視点で見ることができるようになったのは，このインターンシップに参加してよかったと思ったことの一つです。

最後に，このインターンシップを支えてくださった塚脇真二先生，木村誠先生，チューターのはにみおさん，私たちを受け入れてくださったアプサラ公団の皆様，様々な準備等してくださった学務の方々，毎日笑顔で送り迎えしてくださった運転手のペンさん，本当にお世話になりました。ありがとうございました。そして 2 週間一緒に過ごしたなな，

写真 5．ラスト業務後じゅんちゃんポーズ

ひな，なおちゃん，かの，なみ，おーみ，みく。このメンバーに出会えたことに感謝です（写真 5）。

５．チューターの報告

1）チューターのお仕事

金沢大学人間社会学域国際学類 4 年　埴崎未緒

8 月 18 日から 9 月 2 日までの 2 週間，カンボジアのアンコール遺跡整備公団インターンシップにチューターとして同行した。今年度の参加学生も 2 年生以下が大半を占めることが予想できたため，チューター募集のメールを受け取った時には私よりも年の近い 3 年生がチューターになった方が良いのではないかと思い応募するかはかなり悩んだが，昨年このインターンシップに参加した時から街や遺産にどのような変化が生じたかを確認したい，部活を引退してから他人と話す機会が減ったため後輩と関わる機会を得たいという理由で思い切って立候補した。昨年は 2 人以上の体制で行っていたチューター業務を一人でこなすことに出発前から不安はあったが，真面目で勉強熱心な参加学生たちのおかげで大きな問題もなく無事にインターンシップを終えることが出来た。

チューターとしての仕事は金沢からシェムリアップ間の移動の引率，現地での学生の体調・スケジュール管理，食事の際の会計の取りまとめが主なものだ。公団での業務時間中は学生同士が助け合いながら積極的に業務に取り組んでいたため私が学生をサポートすることはほとんどなかった。以下に私の業務について時系列に沿って示す。

昨年のインターンシップは私にとって初めての海外渡航だったため，出発前の荷造りの段階から分からないことばかりであった。今年の参加学生は海外経験が豊富な子が多かったが私と同じくこのインターンが人生初海外になる子もいたため，可能な限り不安を取り除くサポートをするべく出発前に持っていくべきものや現地での環境について質問されたことには何でも答えるようにした。しかし現地に着いてみると私以上に学生の方が準備が良く，自分を不甲斐ないと思うと同時に学生の自主性を頼もしく感じた。

金沢からの移動は金沢大学の学生を小松まで連れていき，小松空港からは公立小松大学の学生と引率の木村先生と合流し，羽田とバンコクを経由してシェムリアップに入った。小松からは木村先生に乗換案内を任せきりになってしまったため塚脇先生への連絡は私が主に行った。連絡のために Wi-Fi が必要だったため出発前に接続方法などを調べていたので学生にもすぐに教えることが出来た。カンボジアでは入国の際に顔写真とビザが必要だったのだが，事前に用意していた 4 枚の顔写真を切り忘れていた学生がいたため私が予備として持っていた 1 枚ずつ切った顔写真を使ってもらった。面倒くさがらずに全員分 1 枚ずつに切っておいて本当に良かったと思う。

写真 1．市場にて

到着したその日は業務がなかったた

め，現地で使う携帯を購入したりその近くの市場を見に行ったりした（写真 1)。本来なら学生が携帯を選ぶのを手伝うべきだったが，日本から持って行った私自身の携帯が壊れているかもしれないと店員さんに言われパニックになっている間に学生たちの買い物が終わっていた。

業務が始まってからは毎日朝と夕食前にホテルでミーティングを行った。ミーティングでは朝はその日の業務予定，夕食前は翌日の予定確認と学生の体調確認を行っていた。体調確認においては，皆の前では言いにくいこともあるかもしれないと思い，学生に口頭で確認するだけではなく顔色や表情からも学生たちが無理をしていないかなどをうかがうことを心がけていた。1 週目に慣れない環境からか一日だけ体調を崩してしまった学生がいたが，それ以外の大きなトラブルは一切なくこのインターンシップを終えられたのは喜ばしいことである。

学生の業務は 4 つのグループに分かれていて，バライやカンボジアの伝統的生活，新しい村づくりを見学し説明を受けていた。私はいずれかのグループに同行し，業務中の様子の写真を撮ったり学生の様子を観察したりしていることが多かった (写真 2)。昨年と異なるところとしては，午後に公団本部でディスカッションをすることが減ったこと，それぞれのグループでの業務が中心になったことが挙げられるだろう。今年はインターンシップ中に他国から来客があるなどで公団側の都合がつかず午後がフリーになったり，その穴を埋めるために午後も現地での業務が入ったりなどして午後のディスカッションが少なかった。昨年はディスカッション中に補足の説明を受けたり分からないところの質問をしていたため，今年の学生が業務の理解に支障をきたさないか心配していたが，現地業務の間に積極的に質問したりお互いの分からないところを教え合うインターン生を見て杞憂だったと感じた。また，昨年は 4 グループに分かれていたものの 2 グループ合同でバライに行ったり，全員でルンタエクの説明を受けたりしていたためグループごとの専門性はほとんど見られなかったが，今年はそれぞれ別の業務地に赴いて従事する日が多かったため，担当場所についてより深い知識を得られていたように思う。

写真 2. アンコール・ワットでの業務

チューターは学生のサポートをするため，休日でも仕事はあった。とは言え体調管理とフリータイムでの学生の行き先を把握することが主だったため業務日とすることは変わらない。異なるのは私自身もフリータイムで何をするにも自由だったことである。ハス畑のハンモックで涼んだり，昨年と変わらず活気のあるマーケットで買い物をしたり，昨年も訪れたカフェに入ると勝手に Wi-Fi が繋がったりと「またカンボジアに来られたんだなあ」と実

感できて嬉しかった。

2 週目には業務の後に児童養護施設を訪れた。塚脇先生曰く，子供たちを集めては他人が来るたびに悲しげな顔をさせるようなビジネス孤児院もあるそうだが，私たちが訪れた施設はごく普通の子供たちが学校に通って帰ってくるごく普通の場所だった。私は昨年も同じ施設を訪れたのだが，今年は昨年よりも子供たちの年齢層が高くなっていたのが印象的だった。お土産として持って行ったおもちゃを使うことは出来なかったが，新しい子どもが増えていない（少なくともこの施設では）ということが垣間見える変化で大変喜ばしいことだと感じた。来年以降もこのインターンシップの参加学生が同じ施設を訪れることが出来た暁にはその年の様子も報告書に記してくれれば嬉しく思う。

業務最終日の夜には公団の方々と食事をした。学生たちは仲良くなれた公団の方々とお喋りをしたり写真を撮ったりと別れを惜しんでいた。私は人見知りの性格が災いして業務中もこの最後の食事会でも公団の方々とあまりコミュニケーションを取ることが出来なかったが，学生がインターンシップの修了証書を受け取る際に身の置き場に迷っていると，ある公団職員の方が横に呼び寄せてくれた。そのことを嬉しく思い，お礼を言って「私はインターンシップ生でも引率の先生でも公団職員でもないから自分がどこにいればいいのか分からなかった」と打ち明けると，「一度私たちと一緒に仕事をしたんだからもう君は仲間だよ」と優しく返してくださった。公団の方々に限らず，こうしたカンボジアの人々の優しさに触れるたびに「カンボジアに来て良かった，また来たい」と思った。

帰国の際，学生と私のキャリーバッグが壊れてしまうハプニングはあったが，皆安全に帰国できた。それもひとえに優秀な参加学生のおかげだったと思う。私は学生をサポートするためのチューターという立場ではあったが，学生から助けられ，学ぶことも多かった。今年の学生は皆明るく素直で好奇心旺盛で，毎日身の回りのすべてから学びを得ようという姿勢は刺激になった。

最後に，今回の主役となった参加学生の皆さん，このような素晴らしい機会を与えてくださった塚脇先生，出国から帰国まで頼りっぱなしになってしまった木村先生，2 週間お世話になった公団の方々をはじめ，このインターンシップ実施に携わってくださった皆様と現地で出会ったすべての方々に感謝申し上げたい。

６．埼玉大学の海外フィールド実習報告

1）埼玉大学の海外フィールド実習

埼玉大学教育学部生活創造講座・准教授　荒木祐二

金沢大学の海外インターンシップに参加するのは今回で 8 度目となる。本年度の埼玉大学海外フィールド実習には，埼玉大学大学院教育学研究科 1 年生の矢島英勝と同教育学部 4 年生の藤井航，3 年生の野手伊吹，2 年生の直井美海の計 4 名が参加した。以下に，本年度の活動を振り返る。

筆者らが合流したのはインターンシップ業務の折り返しを過ぎた 8 月 27 日となった。到着時，埼玉大学の学生たちは移動の疲れもみせず（写真 1），ホテルに着いてからすぐにオールドマーケットを訪れた。マーケット内では地元の野菜や果物について，栽培学を専門の一つとする筆者が説明をし，日本の植物との共通性と相違性に興味を示していた。また，豚や鶏の肉売り場では豚の頭や鶏の内臓がそのままの状態で店頭に並ぶ様子に驚いていた。その後はパブストリート沿いのレストラン（タイガーカフェ）でハンバーガーなどの昼食をとり，想像していた以上に美味しかったようで 4 人ともたいへん満足していた。午後からはアプサラ公団へ行き，実習に必要な調査道具を車に詰め込んだ。アプサラ公団までの道沿いで，水牛の群れが歩く田園風景を眺めて日本と違う景観が広がることを認識し，海外へ来た実感がようやく沸いたようであった。

写真 1. シェムリアプ到着

金沢大学と小松大学の学生たちとは 2 日目の昼食（フォーレストラン）で対面した。インターンシップの学生たちはすでに慣れた様子で料理を注文し，それぞれに対話と食事を楽しんでいた。実際に会ってみて，前評判どおりの雰囲気の良さがうかがえた。ルンタエクでも村の成立や生業に関して英語で積極的に質問したり，アプサラ公団内でも熱心にインターンシップの振り返りを行っている様子を垣間見て，参加学生たちの和やかながらも一人ひとりの意識の高さがうかがえた（写真 2）。引率された塚脇氏と木村氏も安心してみていられたことだろう。

写真 2. ずぶ濡れでも元気な学生たち

インターンシップの傍ら，埼玉大学チームはアンコール遺跡内やトンレサップ湖の森林・水圏環境におけるフィールド実習を行った（写真 3，4）。トンレサップ湖の視察には塚脇氏も同行してくださり，トンレサップ湖の成り立ちやドローンを用いた空中撮影について解説していただいた。船に乗りながら，筆者からはトンレサップ湖は雨期と乾期で景観が劇的に変化する世界的にも稀有な自然環境を呈し，周囲の森林は半年ほど湖に浸かる浸水林であり，そこに適応できた希少な植物を目の当たりにしているといった話を伝えた。

写真 3．トンレサップ湖実習

写真 4．ドローンの操作訓練

学生たちは，カンボジアに来なければ味わえないフィールドの醍醐味を体感し，専門家たちによる解説を現場で聞くことができて非常に貴重な経験ができたと思う。当日は，トンレサップ湖氾濫原内の村も訪問し，水上に高床式住居を立てて暮らす住民と会話したり，植物資源を利用した暮らしの様子を観察したりした。学校も訪問してみたが，昼の時間帯で誰もいなかったのは残念だった。

また，アンコール遺跡内の住民生活支援としてアプサラ公団が設立したルンタエク村では，有機農法により栽培されたモリンガを紹介していただいた。埼玉大学にて「スクールガーデニング」や「栽培技術の基礎」という作物栽培実習を受講していた学生たちにとって関心の高いイベントになったと思う。ここでは植樹も企画されたが，あいにくのスコールにあってしまった。ただし，これも熱帯モンスーン気候を肌で感じられたよい経験になったと思う。その後に寺院内でお祈りをささげ，インターンシップとフィールド実習の活動が無事に終えられることを願った（写真 5）。

写真 5．ルンタエク寺院での祈り

また，アンコール遺跡の見学は，日程の都合上，ネアック・ポアンとスラ・スラン，タ・

プローム，バイヨン，アンコール・ワットに限られた（写真 6)。各遺跡内においても，筆者による植物の解説が中心となり，北バライの水生植物やタ・プローム内の巨樹，アンコール・ワット内の森林構造などについて学習した。遺跡内の実習において，動物好きの矢島はサルやトカゲに反応したり，藤井はスポングの板根に身をうずめたり，つる植物のブランコを楽しんだり，野手と直井はオジギソウをみつけては片っ端から葉を閉じたり（本人らは「オジギソウチャレンジ」と呼称）して，各自の興味に応じた観察や活動を満喫した様子だった（図版写真)。

写真 6. フタバガキ科の樹木の観察

本年度の海外フィールド実習の開催にあたり，昨年度に引き続き埼玉大学グローバル化推進経費に採択されて学生 4 名分の旅費を工面することができた。申請時には過去の報告書を添付させていただき，その内容が評価されたことを素直に喜びたい。本年度の参加学生はそれぞれが個性的で興味も異なっていたが，日を追うごとに協調性が高まっていったようにみえた。そう思うゆえに，滞在期間が実質 4 泊 5 日と短くなった点を反省したい。カンボジアで筆者が植物や遺跡，人の暮らしについて熱心に話しても，固有名詞が多くて学生たちは消化不良のまま帰国の途に着いてしまったのではないかと内省している。それでも，彼らがカンボジアの自然や人々の暮らしに直に触れたことで，将来，教育に携わる立場から社会のあり方や自分がやるべきことを深く考える契機になったと前向きに捉えたい。

インターンシップは活動全体が醸成され，アプサラ公団職員たちも毎年の恒例行事として参加学生たちを快く向かい受け入れてくれている。今後も，学生たちの成長を後押しする本活動にかかわらせていただき，同時期に埼玉大学海外フィールド実習を継続していけることを願っている。末筆ながら，この度の渡航でもあらゆる面でお世話になった塚脇氏をはじめ，本学学生も気遣ってくださった小松大学の木村氏，全面的にご支援いただいたアプサラ公団副総裁の Peou 氏と公団の職員たち，運転手を務めてくれた Bany 氏，車両の手配や学生たちの世話をしてくれた Pheng 氏，その他ご支援いただいた関係各位に心より感謝申し上げる。

2）カンボジアで学んだこと

埼玉大学教育学部乳幼児教育コース 2 年　直井美海（みう）

今回，カンボジアフィールド実習に参加して，現地の人々の暮らしを間近に見ることが出来ました。また，現地の動植物と生活の関係や子ども達の様子を知ることが出来ました。

初日には，ニャック・ポアンという遺跡を訪れました。ニャック・ポアンとはクメール語で「絡みつく蛇」という意味で，実際にそのようなモチーフが刻まれていました。そこへ辿り着くまでには大きな池のような場所があり，それは雨季の影響で増水したシェムリアプ川の水で満ちていて，水に浸かった木々や沈水植物がよく見られました（写真 1）。植物の中には空心菜という茎の中が空洞になっている野菜があり，地域でよく食べられており，レストランや食堂でも炒め物にしてよく出されています。ナンゴクデンジソウ（田字草）という植物は上から見た葉の様子が本当に「田」の字のようで印象的でした。遺跡自体は，名前の通り，蛇が塔にからみついているようなデザインがあったり，当時薬草などを育てていたという 4 つの池があったり…と，アンコール王朝が確かに栄えていたことを感じました。

写真 1. 水に浸かった木々

2 日目は，トンレサップ湖へ埼玉大学のメンバー，そして塚脇先生と行きました。初めてドローンで上空からの景色を見ましたが，浸水林のあまりの広大さに圧倒されました。トンレサップ湖は東南アジア最大の湖で，雨季と乾季で水面の高さが変わるため，そこに住む人々の暮らしはとても特徴的でした。家は基本的に高床式であり，一年のほとんどが浸水している地域では水上住宅・学校・レストランなどが見られ，浮きとして床下に竹がくくりつけられていました。人々はボートで移動をしており，たらいのようなものに乗っている子ども達もいました。水上レストランではワニとナマズが飼われていて，鳥小屋のある水上住宅もありました。鳥は湖周辺の村でもよく飼われていて，とても身近な動物なのだと思いました。

写真 2. 乾燥中のホテイアオイ

身近な植物としては，ハスとホテイアオイが見られました。ハスはよく栽培されていて，ハスを見ながらハンモックに揺られることが，地域の休日の過ごし方のようでした。ホテイアオイは刈り取った後乾かし，籠などを編むのに使われるそうです（写真 2)。トンレサップ湖周辺を見学した後，昼食の場でインターンシップの学生と初めて対面しました。地域にとても馴染んでいて，食べるものも注文する様子もさすがだなと感じました。夕食もインターンシップの学生達と一緒にとり，アプサラダンスを見ました。アプサラとは，伝説の天女のことで，踊り子さん達がきらびやかな衣装を着て舞っていました。とても幻想的で，カンボジアの伝統を見て取ることが出来ました。

3 日目は，サトウヤシから砂糖を作る過程を見学した後，バンテアイ・スレイという寺院遺跡を訪れました。「女の砦」という意味で，昔女性を守るために作られたという説があります。彫刻が見事で，東洋のモナリザと言われるほど，天女像が美しく彫られていました。抜けた先では子ども達が砂山に草花を飾ったり木登りをしたりして遊んでいました。その後ルンタエク･エコビレッジを訪れ，モリンガという植物の研究やエコビレッジの開発についての説明を聞きました。インターンシップの学生達が英語で質問したり現地の子どもに声をかけたりする様子は印象的でした。そこではスコールにあいましたが，現地の天候を体感できて良い機会だと思いました。

4 日目はタ･プロム遺跡へ行きました（写真 3)。大きな木々が遺跡を包みこんでいて，神聖な雰囲気がしました。背の高い木が多く，立派な板根が見られました。見つけた動物として，ツムギアリがいました。毒は持っていませんが，かまれるとものすごい痛みがあるそうです。印象的だったのは，遺跡で出会った子ども達のほとんどが物を売っていて，様々な言語で観光客に声をかけている，ということでした。学校に通っていない子どももいて，その子ども達が多くの外国語で話しかける姿に，この国の教育の現状を見た気がしました。

写真 3. タ・プロム寺院

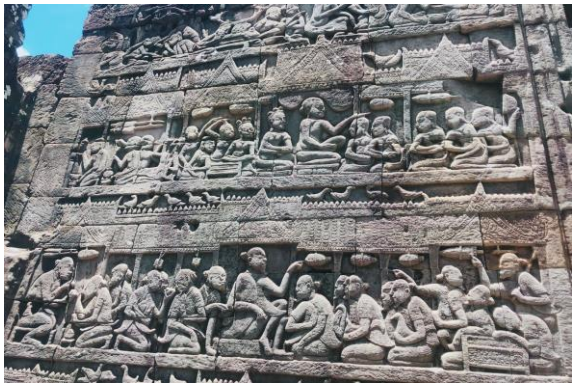


写真 4. 学校と思われる彫刻

5 日目はアンコール・ワットとバイヨン寺院を主に見学しました。アンコール・ワットはさすがの存在感で，アンコール王朝の強大さが表れていました。屋根がとても高く，石で出来ていることが信じられませんでした。遺跡の周りに地

域の人々の住居や僧侶の墓地があり，遺跡は地域住民にとって身近なのだなと改めて感じました。アンコールトムを代表するバイヨン寺院では，アンコール・ワットに引き続き見事な彫刻が見られました。アンコール・ワットの彫刻は戦闘などがモチーフでしたが，バイヨン寺院では人々の生活がモチーフとなっていて，当時の様子が想像できてとても興味深かったです（写真 4)。

約 1 週間のフィールド実習を通して，自分の知らなかった世界を知り，自然と人とのつながりはとても大きいものだと感じました。この実習で学んだことを，これからの自分の学習に活かしていこうと思います。貴重な体験をさせていただき，本当にありがとうございました。

3）カンボジアフィールド実習をふり返って

埼玉大学教育学部生活創造専修家庭科分野 3 年　野手伊吹（いぶき）

8 月 27 日～8 月 31 日の間，私はカンボジアでの海外フィールド実習に参加しました。参加するきっかけとなったのは，2018 年度前期に履修した「スクール・ガーデニング」という授業でした。私は植物（とくに花）を育てることが好きで，花壇を作り，ナスやトマトを育てるこの授業を毎週楽しみに大学生活を送っていました。そんな折，荒木先生からこの実習にお誘いいただきました。私は今まで海外に渡航した経験がなくパスポートの取得にも不安があったのですが，家族や荒木先生のアドバイスを得て，実習に参加する環境を整えることができました。この場を借りて，準備から実習の終了までお世話になった家族と荒木先生には感謝の気持ちを伝えたいと思います。

写真 1．オールドマーケット

実習の初日から驚きの連続でした。1 日目はシェムリアップ市街地の散策と，ニャック・ポアンに行きました。シェムリアップにはオールドマーケットやパブストリート，ナイトマーケットなどの店が多く並ぶ地区があります。そこでは現地の人々の生活の様子が感じられました。オールドマーケット（写真 1）には食材が沢山並ぶ横で料理が提供される店もあり，そこで食事をとる人々もいました。外の道沿いには屋台が並び，だいたいの人々はここで食事を済ませるようだと荒木先生が教えてくださいました。日本では一般的に自宅で料理をした方がお金は掛かりませんが，シェムリアップではさほど金額に差が無いようです。日本とカンボジアの食事の経済事情の違いに驚き，料理の手間が省ける生活が少し羨ましかったです。

写真 2．デンジソウ

ニャック・ポアンに向かう道では，日本にはない多様な植物が自生していました。ひとつひとつ名前を教わったのですが，多すぎたので全てを覚えることができず反省しています。見た目のインパクトで覚えられたナンゴクデンジソウ（写真 2）は，シダ植物でありながらファンシーな見た目をして

いて，とても好きになりました。

2 日目はトンレサップ湖での調査とアプサラダンスが印象に残っています。この日は朝一でボートに乗り，広いトンレサップ湖を遊覧しました。私は恐がりな性格をしているので，日本の船の比ではない揺れ方をするボートに不安がありましたが，同乗した皆さんが休憩の時間を作ってくれたのでどうにか体調を崩すことなく陸に戻ることができました。トンレサップ湖には水上で生活する人々がおり，住宅以外にもレストランや教会のような建物もみられました（写真3)。船も含めて，トンレサップ湖での生活は日本では体験することができないだろうと思いました。この日の夕食は，公立小松大学と金沢大学から来たインターンシップの学生たちと共にレストランでビュッフェをいただきました。インターンシップの学生たちは私たちより先にカンボジアに滞在しており，慣れた様子でした。このレストランでは食事をとりながら現地の伝統的な踊りである「アプサラダンス」（写真 4）を見ることができました。ダンスは，音楽とも相まってとても華やかでした。

写 3. トンレサップ湖

写真 4. アプサラダンス

3 日目から 5 日目はカンボジアに数多く存在する遺跡を巡りました。バンテアイ・スレイの美しいレリーフはつい見とれて時間を忘れるほどでした。タ・プロームの大きな木はとても見応えがありました。修復されていない部分の瓦礫に苔が生えていて，神秘的でした。

また，遺跡を見るのと同時にそこに生えている植物を観察するのも楽しかったです。ある日は道中でサトウヤシから砂糖を作る様子を見せていただきました。私はヤシから砂糖がとれることをそれまでは知らず，その製造工程はとても興味深か

写真 5. サトウヤシ

ったです。見せていただいたのは，ヤシのおしべの先端を切り落とし，染み出てくる樹液を溜めている様子でした（写真 5）。樹液を煮詰めることで砂糖になるようです。完成した物を食べたのですが，味は黒糖のようでとても美味しかったです。

日本では温室のある植物園でしか見られないような花が，カンボジアでは当たり前のように咲いていました。中でも感動したのは，アンコール・ワットで見かけたハイビスカス（写真 6）です。ハイビスカスは，日本では冬になると寒くて枯れてしまうので室内に移動して冬越しさせる必要があります。しかし，カンボジアは日本ほど気温が下がることがないため，地面に直に植えられていました。木の根元にさりげなく咲いていたので，気がつけて嬉しかったです。

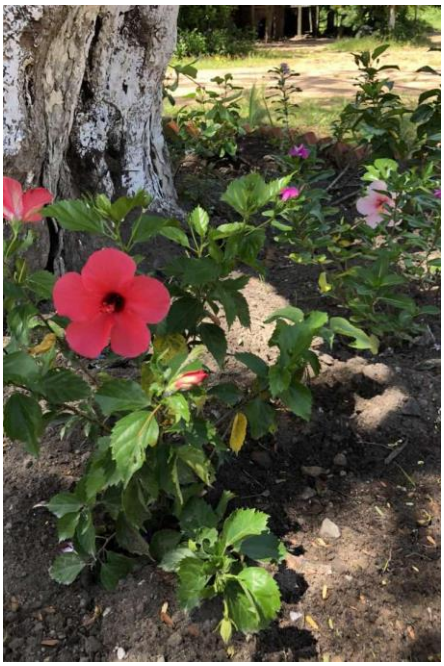


写真 6. ハイビスカス

この実習を通して，世界には日本と異なる文化があり，その生活の基となっている自然環境もさまざまだということが分かりました。カンボジアで得た経験は，生涯忘れることができないと思います。

4）You は何しにカンボジアへ？

埼玉大学教育学部生活創造専修技術分野 4 年　藤井　航（わたる）

日本を出国し，帰国するまでの 5 日間，まるで夢を見ていたかのようにあっという間に過ぎてしまった。しかし，いくつもの美しい思い出と，貴重な経験を得て，お気に入りの財布を落としたということは紛れも無い事実である。それは iPhone に追加された数百枚の写真と，右ポケットの虚無感が物語っている。

今回，私は荒木先生の紹介を受けてカンボジア海外フィールド実習に参加させていただいた。大学の友人にこの実習の経験者がおり，話を聞いていたため以前から興味を持っていた。特に，現地の方との交流，インターンシップで滞在している金沢大学と公立小松大学の方との交流，アンコール遺跡見学などに魅力を感じていた。実際に行って，体験することで，日本では味わうことができない貴重な経験を得た。

まず，現地の方々との交流についてである。特に印象に残っているのは，ドライバーの方と，売り子をしている子どもたちである。

ドライバーの Bany 氏には 5 日間運転をしていただいた（写真 1）。とても明るく気さくな方であったため，すぐに仲良くなることができた。私が財布を落としてしまった時，とても親身になって探してくれたことを絶対に忘れない。もし日本で困っている外国人の方を見つけたら，積極的に声を掛けていこうと思う。

写真 1.　ドライバーの Bany 氏と実習生

また，売り子をしている子どもたちは 10 歳前後の小学生くらいの子たちが多かった。朝の観光地からナイトマーケットまで，どんな時間帯でも「five dollars，ヤスイヤスイ」とお土産用のマグネットなどを持って声を掛けてきた。日本では考えられない状況であると感じた。しかし，それぞれの国には事情があるため，日本の価値観だけで判断することも間違っているとも感じた。また，遺跡の近くで集まって砂遊びをしている子どもたちや，川遊びしている子どもたちもいた。異なる国の子どもたちの様々な表情が見られた事は，貴重な経験であった。今後の教育

写真 2.　蜘蛛を見つめる学生

実習などでも，しっかりと子どもたちの表情を見ていきたい。

次にインターンシップの方々との交流では，とても驚かせられることが多かった。私たちよりも 1 週間早く現地に入っていたが，もっと長く滞在していたのではないかと思わせられるほど順応しているように見えた。ルンタエクで英語のプレゼンを聞き，英語で質問をしている姿や，土窯の博物館での学ぶ姿勢などに感銘を受けた。一番驚いたのは，ココヤシの葉っぱについていた大きめの蜘蛛を見つけたときに「揚げたら美味しそう」と言っていたことである（写真 2)。そうした物怖じしない力強さも見習いたい。

次に，アンコール遺跡の見学はとても良い経験となった。過去に観光でカンボジアに来てアンコール遺跡は見たことがあったため，今回は違った視点で見たいと思っていた。前回はただ遺跡を眺め感動していたため，遺跡にまつわる歴史や，遺跡周辺に住んでいる方々を知りたいと思った。事前に調べるだけでなく，そうした視点で実際に見ることで私にとって深い学びとなった。特に驚いたのが，アンコール・ワットのすぐ裏に学校があったことである。学校は休みであったが，ハンモックを吊るして寝ている子供達がいた。世界遺産に登録されている地域に，遺跡と現地の方が共存していることを肌で感じることができた。遺跡の保全も，そこに住んでいる人の生活も上手に残していってほしいと感じた（写真 3)。

写真 3. アンコール・ワットの裏にある学校

今回の実習を通して私は，国境も言語も壁ではなく，ただの線とツールであり，障害物ではない。進んで飛び込んでみることが大切であると学んだ。全力で挑戦していく事で得たものはとても大きかった。失ったものは 20 ドルの財布と現金 100 ドルだけである（写真 4)。

写真 4. 突然のゲリラ豪雨にはしゃぐ

最後に，このような素晴らしい機会をつくってくれ，引率していただいた荒木先生をはじめ，本当にたくさんの方にお世話になりました。心より感謝いたします。ありがとうございました。

5）カンボジアフィールド実習に参加して

埼玉大学大学院生活創造専修技術分野 1 年 矢島英勝

大学院 1 年生の夏休み，8 月 26 日から 9 月 1 日にかけてカンボジアで行われたフィールド実習に参加しました。学部生の時から荒木先生や友人からカンボジアの良さをずっと聞いて来たこともあり，楽しみで仕方なかったです。本来ならば，カンボジアに行ったことのある人から事前情報を得たり，インターネット・本を用いて情報を調べたりと知識を入れておくのが良いと思います。しかし，私は行ったことの無い地への楽しみな気持ちや知らないことを知れる新鮮さを大切にしたかったため，留意事項といった必要最低限の知識以外は特に入れずにカンボジアに向かいました。

私がカンボジアにて体験したことや経験したことで印象深かったことを 3 点報告させていただきます。

写真 1. アンコール・ワット

まず, 1 点目は各遺跡群の荘厳さです。ニャック・ポアン，バンテアイ・スレイ，タ・プロム，アンコール・ワットに出向き見学をしました。どの遺跡も素晴らしいもので，よくこの遺跡を重機などの道具もなくこれだけ高く，また精巧な彫刻をつくることができたのかが疑問に思ってしまうほどでした。その中でも，ありきたりかもしれませんが，アンコール・ワットはやはり圧巻でした。観光客の多さから他の遺跡のような静けさのようなものは無いものの，その規模は他の遺跡には無いものでした。また，社会科の教科書で見たアンコール・ワットよりもスケールといい敷地面積といい想像と大きく違ったのも，印象深さに拍車をかけたのかもしれません（写真 1)。

写真 2. ドローンを操作

2 点目は金沢大学の塚脇先生とともに行われた，トンレサップ湖でのフィールド実習です。トンレサップ湖の大きさは「琵琶湖の 20 倍もある」と事前の説明で聴いたものの，私の考えているような湖とは全然違いました。船に乗り込んでからまるで海を進んでいるのかと錯覚してしまいそうな波と，彼方にある水平線がそこにはありました。日本の琵琶湖ではこれは無いと思いながら，その場で

はただただ「凄い」という言葉しかありませんでした。トンレサップ湖ではドローンを用いて，湖や植物の広がり方を確認しました（写真 2)。また途中，水上に建てられている家を何件も見かけました。そこでは多くの子どもたちが湖に飛び込んで泳いでいたり，タライのようなものに乗って遊んでいるのが見受けられました。また，幼稚園の年中か年長かぐらいの子どもが父親と泳ぎの練習をしているのも見かけました。現地の小学校に入学できる基準として泳げるかどうかが一つ大事になってくるそうなので，彼らにとって泳げるかどうかは成長の見極めの一つとなっているのかもしれません。また，トンレサップ湖から帰ってくるとき，途中ハス畑（写真 3) といくつかの民家を見学しました。蒸し暑くないのか疑問でしたが，高床式の住居は風の通り方がよく考えられていて意外にも涼しそうでした。高床式ではないのですが，ハス畑の周りにあった建物に入ってハンモックも体験しました。

写真 3. ハス畑

3 点目は現地の人々や子どもたちについてです。今回の実習中たくさんの人々に出会いました。例えば，実習時毎日我々の時間に合わせて車を運転してくれたドライバーさん，実習を滞りなく進めるのに助力してくださったアプサラ公団の方々，遊んでいる中インタビューさせてくれた子どもたちと挙げればキリがないわけですが，その中でもタ・プロムで出会ったお土産売りの女の子に私は衝撃を受けました。その子は片言の日本語で「1 つ 1 ドル，2 つ 1 ドル，3 つ 1 ドル・・」と我々に近づいてきてお土産のマグネットを売ってきました。あまり良いことではないかもしれないのですが，とても幼く見えたので英語で歳を聞いてみると 11 歳（カンボジアは数え歳でいうことが多いため，実年齢は 10 歳）とのことでした。正直，買ってあげようかと思ったのですが，その子からお土産を買ってしまうと，その子はお土産売りをやめられなくなってしまうというのを先生から聞いていたこともあり「Sorry」と連呼して足早に車に戻り，買いませんでした。あの子くらいの時，私は何をしていたか，考えると胸が痛くなります。あの子は日本人の同じくらいの子どもたちがどのように過ごしているのか知る由もありませんが，私たちにとって普通のことであっても彼女にとっては幸せに感じられるのだろうと，深く考えさせられました。

今回この実習に参加して，たくさんの「新鮮さ」に出会うことができました。知識を文献やインターネットを用いて得ることもとても大切なことですが，やはり体験し得るものには敵わないことを実感しました。今後，この経験を活かすことができたらと思います。実習の間の引率また様々計画をしてくださった荒木先生をはじめ，たくさんの方に心から感謝いたします。ありがとうございました。

７．資　料

2018 年度アンコール遺跡整備公団インターンシップの概要

１．参加者

（１）インターンシップ参加学生

横井 菜美（公立小松大学保健医療学部看護学科 1 年，グループ 1）
村井 七海（金沢大学人間社会学域学校教育学類 社会科教育専修 2 年，グループ 1）
大御 悠瑠花（公立小松大学国際文化交流学部 1 年，グループ 2）
田中 日菜向（金沢大学人間社会学域国際学類 国際社会コース 2 年，グループ 2）
肥田 望来（公立小松大学国際文化交流学部 1 年，グループ 3）
小泉 奈央（金沢大学人間社会学域国際学類 国際社会コース 3 年，グループ 3）
土橋 香乃（公立小松大学国際文化交流学部 1 年，グループ 4）
酒井 朋花（金沢大学人間社会学域人文学類 フィールド文化学コース 2 年，グループ 4）

（２）チューター

埴崎 未緒（金沢大学人間社会学域国際学類 日本・日本語教育コース 4 年）

（３）連絡教員

塚脇 真二（金沢大学環日本海域環境研究センター・教授，8 月 16 日～9 月 5 日）
木村　誠　（公立小松大学国際交流センター・准教授，8 月 18 日～9 月 2 日）

（４）埼玉大学（8 月 27 日～9 月 1 日）

荒木 祐二（教育学部生活創造講座技術分野・准教授）
直井 美海（教育学部乳幼児教育コース 2 年）
野手 伊吹（教育学部生活創造専修家庭科分野 3 年）
藤井 航（教育学部生活創造専修技術分野 4 年）
矢島 英勝（大学院教育学研究科生活創造専修技術分野 1 年）

２．カンボジア側受入機関・責任者

Hang Peou（カンボジア国立アンコール遺跡整備公団副総裁, Deputy Director-General, Authority for Protection and Management of Angkor and the Region of Siem Reap, Cambodia/金沢大学環日本海域環境研究センター客員教授）

３．各グループの担当業務（図を参照）

グループ 1：西バライ貯水池の環境保全・観光整備事業
グループ 2：北バライ貯水池の環境保全・観光整備事業
グループ 3：ルンタエク・エコビレッジの整備事業
グループ 4：アンコール世界遺産の地域住民支援事業（クメール・ハビタット）

４．全体日程（2018～2019 年）

3 月 7 日（水）アンコール遺跡整備公団と打合せ（シェムリアプ）
3 月 28日（水）第 1 回実施委員会（金沢大学，実施概要の確認）
4 月 6 日（金）インターンシップ説明会（金沢大学人間社会学域国際学類生対象）
4 月 10 日（火）インターンシップ説明会（金沢大学全学生対象）
4 月 12 日（木）インターンシップ参加者の募集開始（金沢大学）
4 月 26 日（木）インターンシップ説明会・募集開始（公立小松大学全学生対象）
5 月 21 日（月）～24 日（木）インターンシップ応募者 1 次選考（公立小松大学）
5 月 23 日（水）インターンシップ参加申し込み〆切（金沢大学）
5 月 24 日（木）インターンシップ応募者 2 次選考（公立小松大学）
5 月 28 日（月）インターンシップ参加者決定（公立小松大学）
5 月 29 日（火）第 2 回実施委員会（金沢大学：応募書類の書類選考）
5 月 30 日（水）インターンシップ参加者決定・通知（金沢大学）
5 月 31日（木）選考結果を応募学生へ通知（公立小松大学）
6 月 4 日（月）アンコール遺跡整備公団と打合せ（シェムリアプ）
6 月 20 日（水）第 1 回インターンシップ事前研修（金沢大学）
6 月 27 日（水）第 1 回インターンシップ事前研修（公立小松大学）
7 月 4 日（金）第 2 回インターンシップ事前研修（金沢大学）
7 月 11 日（水）第 2 回インターンシップ事前研修（公立小松大学）
7 月 25 日（水）第 3 回インターンシップ事前研修（公立小松大学）
8 月 3 日（金）インターンシップ合同事前研修（金沢大学／公立小松大学）
8 月 17 日（金）アンコール遺跡整備公団との最終打合せ（シェムリアプ）
8 月 18 日（土）～9 月 2 日（日）インターンシップ実施期間（※委細は別記）
10 月 17 日（水）インターンシップ報告会（公立小松大学）
10 月 18 日（木）インターンシップ報告会（金沢大学）
11 月 6 日（火）インターンシップ合同事後研修（公立小松大学／金沢大学）
1 月 15 日（火）インターンシップ報告書の出版

５．渡航日程と現地での活動（2018 年）

8 月 18 日（土）小松／金沢→小松空港（19:45）－JL192 便→（20:55）羽田空港
8 月 19 日（日）羽田空港（00:40）－JL033 便→（05:00）バンコク・スワンナブーム空港（08:00）－JL5963（PG903）便→（09:10）シェムリアプ空港，午前：ホテルにチェックイン，午後：滞在準備
8 月 20 日（月）午前：アンコール遺跡世界遺産の見学（プラサット・クラヴァン，スラ・スラン，プラダック村，アンコール・トムなど），在シェムリアプ領事事務所訪問，午後：インターンシップ始業式，グループ業務の決定，グループごとに

業務担当者との打合せ

8 月 21 日（火）午前：各グループそれぞれ担当業務地へ，午後：公団本部でオフィスワーク

8 月 22 日（水）午前：各グループそれぞれ担当業務地へ，午後：公団本部でオフィスワーク

8 月 23 日（木）午前：全グループバンテアイ・クディ寺院での植樹祭に参加・スピエン・トモーの育苗地見学，午後：シェムリアプ市内見学

8 月 24 日（金）午前：全グループ，古代集落ロヴィア村・プォック市場訪問，午後：クメール・ハビタットでクメール建築の研修

8 月 25 日（土）午前：トンレサップ湖見学，午後：自由行動

8 月 26 日（日）午前：バイヨン寺院・バンテアイスレイ寺院見学，午後：自由行動

8 月 27 日（月）午前：全グループ，アンコール・ワット寺院の見学，午後：バイヨン寺院の見学，※埼玉大学グループ到着（午前）

8 月 28 日（火）午前：全グループ，公団本部で研修，午後：タ・プローム寺院見学，夜：クメール舞踊の見学

8 月 29 日（水）午前：各グループそれぞれ担当業務地へ，午後：全グループと埼玉大学グループでルンタエク・エコビレッジ見学

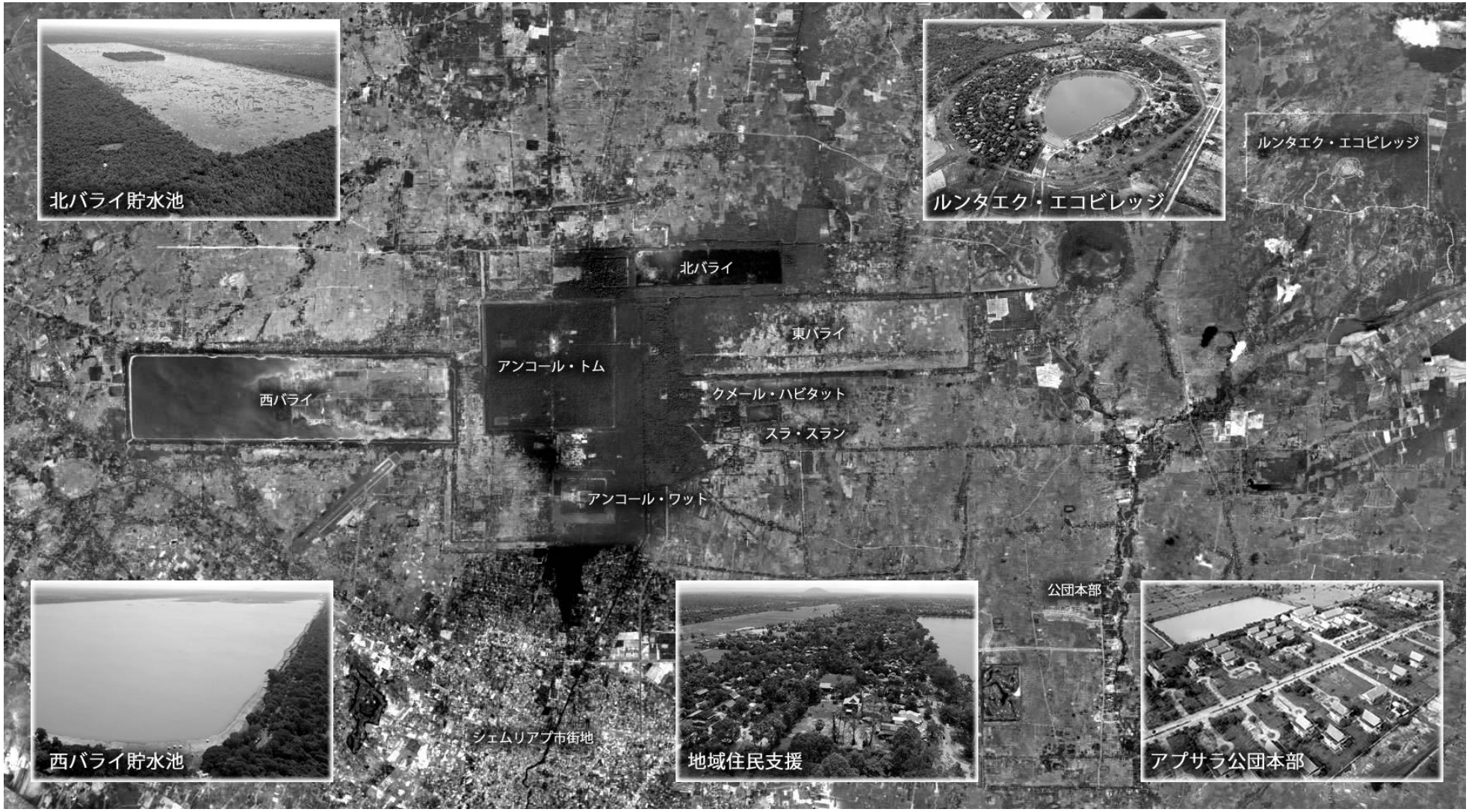
8 月 30 日（木）終日：全グループでクーレン山の見学，夕方：児童養護施設訪問

8 月 31 日（金）午前：各グループで担当職員との業務内容フィードバック，午後：副総裁・担当職員による口頭試問，夜：公団関係者らとのお別れ夕食会（ソッカ・リゾート），※埼玉大学グループ帰国（夕方）

9 月 1 日（土）午前：在シェムリアプ領事事務所實取所長の朝食会，午後：自由行動，夕方：ホテルをチェックアウト，シェムリアプ（19:25）－JL5964 便→（20:35）バンコク・スワンナブーム空港（21:55）－JL034 便（機内泊）→羽田空港（9 月 2 日 6:05 着）

9 月 2 日（日）羽田空港（7:55）－JL183 便→（8:55）小松空港→小松／金沢

※JL：日本航空



各グループの業務地（グループ１：北バライ，グループ２：西バライ，グループ３：ルンタエク，グループ４：クメール・ハビタット，Bing Maps に加筆）

2018 年度アンコール遺跡整備公団インターンシップ報告書

2018 年度アンコール遺跡整備公団インターンシップ実施委員会

木村　誠（公立小松大学国際交流センター 准教授）
上田長生（金沢大学人間社会学域国際学類 准教授）
古泉達矢（金沢大学人間社会学域国際学類 准教授）
辻谷友紀（金沢大学学生部学務課教務係 係長）
塚脇真二（金沢大学環日本海域環境研究センター 教授/
公立小松大学国際交流センター 特任教授）

発行所　公立小松大学国際交流センター
〒923-0921 石川県小松市土居原町 10-10
TEL (0761) 23-6600
FAX (0761) 48-3248
金沢大学環日本海域環境研究センター
〒920-1192 石川県金沢市角間町
TEL (076) 264-5455
FAX (076) 264-5468

印　刷　2019 年 1 月 15 日
発　行　2019 年 1 月 15 日
印刷所　前田印刷株式会社
〒924-0004 石川県白山市旭丘 2-16
TEL (076) 274-2225
FAX (076) 274-5223